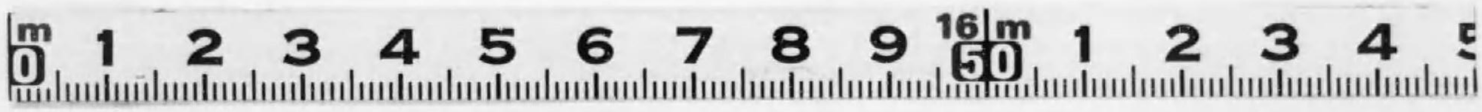
503
268



私どもの主張

吉野作造
有島武郎
森本厚吉

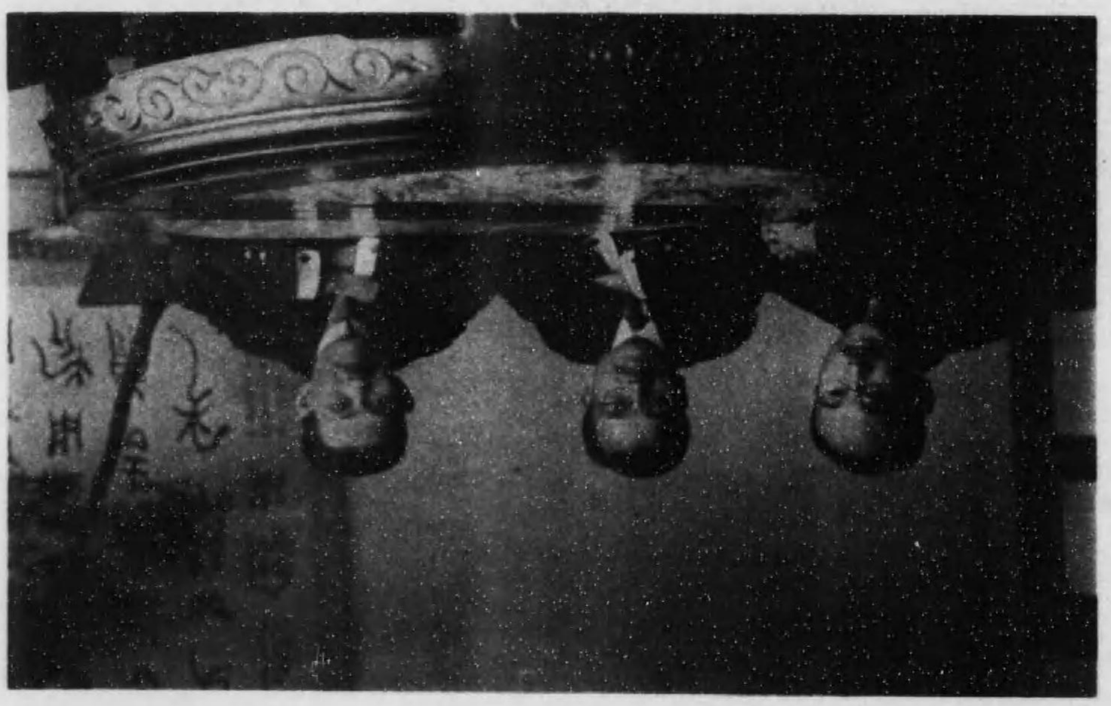
803-268

ホームとその主張

吉野作造
有島武郎
森本厚吉

大正
12.7.5
内交

氏郎武島有.　　氏吉厚本森　　氏造作野吉



五柳先生宅　　五吉聖木森　　五歳仲理吉

はしがき

文明の華が如何に美はしく咲いて居ても我が同胞の大多數は精神的にも物質的にも生活の不安に泣いて居ます。

ブルジョア主義と軍國主義で築き上げた文化が斯くも行詰になつて仕舞ふのは何も不思議な事ではありません。

私共は新時代に生くる新社會を建設して文化の恩惠を汎く民衆に及すべき使命を心から感ずるものであります。

此の使命をはたす爲の一つの手段として「私共の主張」の一端を公刊して廣く社會に訴へんとするのであります。

森本厚吉

森本君のはしがきに書いてある様な主意で文化生活研究を出して居る文化生活研究會は時々講演會をも開いて居る。去年の秋大阪・神戸・京都・奈良に開いたのがたしか二度目の催してあつたと記憶する。

本書に收むる所の諸篇はつまり其時の旅の講演である。併し講演の速記そのまゝではない。森本君は十分に訂正したといふ事であり、中にも有島君は文學を以て立つて居らるゝ丈文字にも苦心せられ新に起稿されたと同樣のものだと想像する。獨り僕の丈は殆んど速記を其儘で出したので、甚だ見劣りするものとなつたのは切に讀者の寛恕を乞はねばならぬ所である。

本書は私共の主張の全體でないことは言ふまでもない。只思ふ所を飾る所なく正直に述べた點に於ては三人の等しく一致する所である。聰明なる讀者は此の一端を押して全體を洞察せらるゝに苦まないだらうが、猶詳しくは著者等の他の述作をも併せて讀まれんことを希望する。

吉野作造

「泉」は講演の速記録では滿足が出來ないので、殆ど全部書きなほした。「美を護るもの」も速記は全然役に立たなかつた。所がその講演の内容が、以前に東京の新人社で講演した「ラヘル・バルンハーゲンの事」といふ題のそれと大差のないのを便りにして、その講演の梗概を「新人」から轉載する許しを吉野君から受けて、僅かばかりの訂正を加へて發表することにした。又京都でした「獨りある時に強し」の内容に略等しいことは、新人會の講演集「新社會への諸思想」の中に述べてゐるから、こゝにはわざと掲載せぬことにした。物好きな讀者はその講演集をも併せ讀んでいたゞきたい。

一九二一・五月一日京都の旅舍にて

有島武郎

有島武郎
泉……一
美を護るもの……二七
森本厚吉
經濟問題の根本義……七九
生活權の主張と其責任……一一七
新婦人と文化運動……一五五
吉野作造
政治家のあたま……一九五
誤られたる本分論……二四五
社會主義の新舊二派……二七五
口絵　コロタイプ肖像
はしがき（森本厚吉、吉野作造、有島武郎）

泉

有島武郎

今、餘り口のよくない木村君（司會者）からよくないことを云ふかも知れないと、紹介を得て此の演壇に立ちますが、實際私は色々よくない事を云ひさうな氣がします。併し、心持はそんなに惡い人間ではない積りです。昨日、大坂の講演會でも前置きて申したのですが、兎に角、人の云ふことを是非となく受入れて、鵜呑みにするやうな人はその人が惡いのだといふことに私はきめて居ます。そんな方は此會場には居られない事だとは思ひますが、萬一居られたとしても、私はその方の受けられた損害の賠償には任じませんから、念の爲め申し上げておきます。

丁度、私が旅をしまして羅馬に弟と一緒に滯在して居りました時に、夫れは

或る秋の夕方でしたが、知り合ひの伊太利の一人の青年が、アックワ・アチエトーザといふ泉のある所に連れて行つてくれました。夫れは羅馬の郊外でタイバー河の左岸にあるのです。皇帝オーレリヤスが造つて遺したと云はれる古い城壁がありますが、その城壁に沿うて一つの門を潜りぬけると、もう羅馬の郊外に出ます。郊外といふと何處でもさうですが人間と自然とが、互に手を延べあつて溫い握手をして居るやうに見えます。その姿は何時でも人の心をなごやかにします。私達三人は西に傾いた太陽の光の下を快い足どりで進みました。その行手にはタイバー河が大きな盤紆（うねり）を描いて居る、その水隈に、殊更にしつらへたやうな、恰好のいゝ村があります。夕方の事ですからそこに行きついた時には、一日の勞役を終つた勞働者だとか、或ひは夕餉の仕度をする女の人等が、その泉のある處に集つて來て、思ひ〳〵に水を汲んで居る時でありました。これと云つて特に騷々しいこともなく、彼等は一日の仕事を終へて、さうして夜の休みに入る前に、各々自分の欲するだけの水を瓶になりコップになり汲み取つて、そこでその儘飲む人もあり、肩にのせて歸つていく人もありました。思へば、この村にも樣々な事が日々起りまして、或ひは喜びも妬みも愛も憎しみもあるのでせうけれども、初秋の夕暮の靜けさに、夫れ等のものは溶け流れ、忘れ果てられたやうに、その泉の傍はしめやかに平和でありました。私共もその泉から少し酸味をもつた清い水を呑んで、再び歸路についた時には、已に夕暮の光も消え果てゝ、月が木立を越えて東の空の稍高くに輝き出して居りました。私達は夜道を辿つて羅馬の城門へと歸るのでしたが、歩きながら私は泉といふものゝ美しい神秘的な感じに浸つたことを今に思ひ出します。

その泉は、人々の汲まない時には、地の深い底の方から湧き出して來ました地面に流れ小さなせゝらぎとなつて落ちて行くのでありますが、その泉の水の流れ落ちたタイバー河は、ゆるやかに平野の間を紆り流れて、彼の羅馬——世

界の古い歴史の中心とも云はれるところの羅馬といふ大きな都會の眞中をよぎつて、やがての果には地中海に注いて行きます。

その泉が何處から湧き出して來るか、恐らくは私共の想像も及ばない暗い底深い地の下を經廻つて、やがて地表に現れて來る。そうして私共の眼に見えるやうな姿になつて、さゝやかな音をたてゝ、タイバー河に流れ込むのです。タイバー河の兩岸には、このアックワ・アチエトーザと云はず、數限りもない泉があつて、それ等から流れ出る地下の水が合流して、あの大きな一流れをなして流れ下ります。夫れが羅馬の市街に入ります時には。忙はしい人間の生活の爲めにつくり出された溝の汚水や、小川の濁水やそこに入り交つて、綠色の美しい水が、冬枯れた草のやうな濁つた黃色になつてしまひます。それが地中海に這入つた後には、太陽の光で蒸發して、雲となつて風に乘り乍ら又想像も及ばない遙かな地方に送られていくのでせう。或ひは又ロミユラス兄弟の確執が行はれた時、その河邊は激しい戰をみたかもしれません。ポンペイやシイザーが凱旋をした時には、外國の捕虜や鹵獲品やが續々とその河をよこぎつて行つた事もありませう。シーザーの殺される前の夜には、赤い物凄い星が現はれて、その光りが河水に映つた事もありませう。野蠻人がアルプスの嶮を越えて入冠して來た時には、無數の死骸が流れに漂うた事もありませう。ペストが羅馬に蔓延した時には、病者の汚物がこの河を毒のやうに汚した事もありませう。かくこの河の水は色々なものによつて或ひはよごされ、或は彩られ、或ひは淨められましたてせうけれども、川上のアックワ・アチエトーザや、その他無數の泉はそれ等の外界の變化にはかゝはりもなく、絶えず湧き流れてタイバー河の水量に貢ぎして居たのてせう。

私共の生活を單に概念的に省みる時には、木村君がいつたやうに、表面的に觀察する時には、どうして見分けをつけていゝか判らない色々な相が雜駁に現

はれて居まして、どれを本當の生活とみればいゝのか判らないとさへ思へます。それはタイバー河の河水に絶えず色々な變化が現はれて、絶えず新陳代謝して、どれをこの河の本當の姿と見ればいゝのか判らないのと似て居ます。しかし乍らその河水の求源をなす所の泉は、縱令雨が降らうが、風が吹かうが、いさゝかの變化も受けない、深い地下にその誕生の場所をもつて居て、タイバー河の流れる限り、決して變る事のない分量と性質との水を供給して居るやうに、私共の生活もその亂雜な層をくゞりぬけて、もう一つその奥に這入り込んでみたならば、永久に亘つて變る事のない、一つの層に出會ふ事がないでせうか。私共の心の要求を、內部的に徹底して行けば行く程、その要求は純粹となり、遂に要求が要求から湧き出る處、要求が要求を生み出す處に行き着く事が出來るでせう。實際をいふと私共は、意識して居るにせよ、無意識にせよ、その生活の根柢を此所に持つて居て、出來る事ならこの內部の純粹な要求に從つて生きようとして居るのです。この要求が、とりも直さず藝術的要求だと私は思ひます。藝術的要求といひますと、甚だしく範圍が狹ばめられるやうに思ふ人があるかも知れませんが、藝術的と私の云ふ意味は、必ずしも詩を作つたり、書をかいたりする事許りではありません。工場で鐵槌を振つて居る人でも、店頭で算盤を彈いて居る人でも、その人達の日常生活が、どうかした拍子にふとその姿を變へる事があります。單に外面的の姿からではなく、鐵槌を握り、算盤を彈いて居るその儘で、藝術的であり、それをする人が藝術家であり得ると思ひます。夫れならば、何が人を藝術家にするのでせう。夫れはアックワ・アチエトーザの泉の水が、地の深い底から何等の力もかりず、水夫れ自身の壓力に依つて地球の表面に湧き出て來るやうに、その人々の仕事が內部の深い要求から現れ出る場合に、彼は藝術家となるのです。かく緊張した狀態の生活の前には、此の地上に定められた所謂道德の制裁もうけず、我々が生れて以來敎へ込まれ

た教育の束縛にも煩はされず、又我々の持つて居る欲求の外部的約束にも係はらされずして、その内部の力は外界に働きかけるのです。この力を私は假りに本能と名づけます。

木村君が今詳說されたので、私の說明の手數が大變省かれるのですが、原生動物の中に見られるやうな、單純な一つの細胞の獨存、その細胞の一つが長い進化の過程を經て、人類といふ位置に達した、さういふ驚異にあまる働きをさせたその力を、私共は考へてみ度い。此の力こそは私達の生命の根柢をなすもので、ニーチェが自我といふ言葉で表はさうとしたのも、卽ちこの力を指すのでありませう。私達の生活の大部分は、生命の内部から溢れ出て來るこの力と、外部との化合でありますが、どうかするとこの化合物が分解されずに殘つてゐて、夫れを私達が手本にして、それと同じ姿の生活を機械的に繰り返さうとするやうな事があります。かうなると、その生活はから純粹に藝術的だといふことは出來ません。そんな氣持で居るなら、算盤、鍬は勿論のこと、縱令詩をかき音樂を奏でて居ても、そこには藝術は成り立たないのであります。

泉の水は一度河に流れ入ると、もうそこでは種々雜多な他の要素と結びついてあの泉の傍で見るやうな清さも、冷たさも、快い酸味も、求め得られなくなるのと同樣です。

しかしながら、夫れて泉の水はその本質を全然なくなしてしまつたかといふに、さうではなく、縱令、その水が雲となつて天に昇つた後でも、猶、泉の水は泉の水であるに相違ありません。そのやうに私達の生活が、どれ程固定化し習俗化しても、藝術的な力がその中にかすか乍らも動いて居ればこそ、この地上生活は腐敗しきらずに殘つていくのです。この藝術的衝動卽ち創造の能力となる本能の力が、固定化し死灰化した旣成道德を破壞し、信仰そのものゝ威力を失つた宗敎を破壞し、ある時には政治を破壞し、社會制度を破壞して、新し

いものを始終注入していくので、私共の生活は有機的に成長しますが、この藝術的衝動を純粋に現したいといふ欲求は、誰の心にも自ら植ゑつけられて居るのです。唯、人によつてその要求が割合にかすかであるか、周圍の事情が夫れに適しない爲めに、思ひ切つてその方面に這入り込まないだけであります。

所が、こゝに萬事を抛つても、この要求を滿さずには居られない一群の人があります。夫れが狹義に於ける藝術家、即ち普通稱せられる美術家なり、文學者なりであります。

そこで私共或る時代或ひは或る地方の生活が、どれ程よく生活されて居るかを計るには、藝術的衝動即ち本能の純粋な表現を目指す所の、狹い意味の藝術をとつて目安にするのが一番手近い方法であります。若し、私共の間に行はれて居る藝術が本當に値打ちの高い藝術であるならば、私共の導いて居る生活も亦、麗はしいよい生活であるといふ事が出來ます。即ち、その時代時代の藝術は云はゞ民衆の心臟ともいひ、良心とも云ふ事が出來ます。だから、若し藝術の質の惡い時代があつたなら、民衆の生活が一見如何によく見えをつても、それは甚だ疑はるべき生活で、その將來には壞敗とか、破綻とか、何か不吉な兆しがあると見ても、さし支へないと思ふのであります。然るに世の中には往々にして美術とか、文學とかいふものは何の役にも立たない有害無益な贅澤物であるといふ風に、非難する人のあるのを聞かされます。私はその非難の的になる所の人間であります。吉野君の昨夜の講演によると、私などは國家無用の長物として見られて居る。私みたいな者が生きて居ても、國家にとつては何の痛痒にもならない程の人間共だといふ風に、みられて居るといふ事です。夫れも一應御尤です。御尤もだけどよく考へると、藝術を要求せざる所の、さうした民衆の生活がどんなだと考へてみると、少くとも生命の本質をなす本能と、殆ど無關係に外部的な約束や習慣にのみ從つて、生活されて居るものではないか

と思ひます。さうでなかつたならば、本能の自らの流露であるべき藝術をかく許り輕視する理由は不可解になりますから。或ひは又、今の藝術は惡いよき藝術をと要求するのを相當な權利と心得て居る人々もあるやうですが、よき藝術を要求する前に、その人々の生活が果してどんな狀態にあるかといふ事を省みる必要がある。若し、民衆の生活が墮落して居るなら、即ち本能の要求といふことが無視されて居るなら、如何によき藝術が要求されても、結局僞りの藝術（本當の意味で藝術とは云へない）が供給される許りでありませう。惡い民衆の生活は、地表を流れて河に注ぎ込む泥水のやうなもので、それが積り積つて泉の出口を塞いでさへしまひます。泉を塞いでおいて、清い水を河に求めようとしても、どうして夫れを得る事が出來ませう。清水が要求される爲めには、先づ泉の口が開けられなければなりません。泉の口が開けられれば要求されないでも、清い水は流れ出る。さうして濁らう濁らうとする河の水に、常に一脈の清さをおくる事が出來る筈です。だから、よき藝術を要求する前に、自分達の生活が如何に生活されて居るかを、省みる必要があるのではないでせうか。

尤も、これは片手落ちに論じ捨てらるべき問題ではないと、いふ事を私もよく心得て居ます。縱令、地表を流れる濁つた雨水がどれ程激しくあつても、若し、泉の噴出が力强いものであつたならば、夫れ等の濁水に口を塞さがれる事もなく、絶えず湧き流れて、河水に清い分子を供給する事が出來る筈です。民衆の生活がどれ程惡くとも、若し本當に力ある藝術家が生れ出たならば、そのよき藝術によつて、濁つた生活を淨め、高めていく事が出來るのは考へられる事柄です。實際それは自然の中にも、時々見られるやうに、人間の生活にも亦見られます。藝術家がよき藝術の生れない理由を、民衆の生活にのみ嫁して、恬然たることは、夫れは餘りに自己の價値を見下げた態度でありまして、藝術家の一人であらうとする私自身も、夫れを愧ぢねばならないのです。私は夫

れに氣付かない事はない積りです。しかし乍ら、概していふならば、如何なる天才も、客觀的にのみ多少なり境遇の力を蒙らないものはありません。キリストだとか、釋迦だとか云はれるやうな、稀有な天才者ですら、幾分その當時の環境によつて彩られて居るといふことは、如何なる人も見逃し得ないでせう。夫れ故に、私は敢へて此處に民衆の生活狀態が、藝術の要求にどれ程の影響を持つかを申し出たのであります。

思ふに、今の時は世界を通じて、生活の相が甚だしい更新を經驗しつゝある時であります。この機運は、勢ひ私共の生活の根據をなす生命そのものゝ檢察にまで赴かねば止みません。この事柄は、一見甚だ空疎なものゝやうに思はれませうが、如何なる革命の時代にも、この生命の本質の檢察が凡ての改革の源となつて居るのです。私達の生命を、新たなる自覺によつて認識するといふ事これは如何なる世にも凡ての事の始まりです。若し、これが正鵠を得て居なかつたならば、我々の文化生活の進路は、狂ひを生じ、歪み、杜絶されるに相違ありません。我々の時代の一つ前の時代にあつては、科學の精神が生活を指導して居りました。その前のローマンティシズムの時代をうけて、單に空想的な地上生活を無視したやうな人生の見方から、もつと實著な、地上に足を踏みしめた見方に、歸らうとする要求が、民衆の間に動いて、生命の本質に對する一つの解釋が、そこから生み出されました。卽ち、私共の感覺に觸れ得る現象、それは誰もが等しく感じて、等しい印象をうけるやうな現象を基礎として、總合的な、歸納的な研究を始め、凡てのそれ等の現象が、自然率といふ物理的な一定の法則によつて律せられて居るといふ事を發見しました。さうして、夫れが單に感覺に觸れ得る現象のみならず、精神界と稱せられて來た物質以外の現象にも、働いて居るといふ事を見出しました。のみならず、精神的現象といはるべきものも、實は物質から分離して獨存し得るものではなく、物質に働きか

けたエネルギーの作用の現れに過ぎないとまで考へるやうになりました。從つて、物質界の現象を規定する法則はその儘所謂、精神界の現象をも規定して居る譯になります。所が物質の世界は、自然律といふ機械的な、一律な法則によつて動かされて居るので、他の力がどうする事も出來ないのでありますが、その同じ力によつて支配される精神界も亦、明かに定つた道に進むのだと、結論される外はなかつたのです。即ち、人間の生活といふものも、衣食住の事から愛憎の問題に至るまで、宿命的な或る力によつて動かされて居るのであつて、夫れをどう變易する事も出來ないと見るに至つたのです。この見方は、唯一つの見方で、一見實際の生活には、何等の關係もないやうではありますが、夫れが歐羅巴の文明に絶大な影響を及ぼしたといふ事は、周知の事實です。即ち人は此の地上によき生活を來さんが爲めには、物質を自分の圍りに一番よい關係に置くの外はないと考へるに至りました。さうして、物質のよき配列のみが人生を幸福にする唯一の道だと信ずるに至りました。さうして、そこに道德上に功利主義が起り、哲學上に宿命論と實際論とが、歴史學上に唯物史觀が起り、社會生活の上に社會主義的傾向が起りました。かゝる樣式の生活に於ては、環境の力が如何なる場合にゝ絶大な威力です。

個人は社會の前には無に等しい存在であり、その意志は大きな宿命の力の投影に過ぎません。さうした傾向が、民衆全體の生活意識を支配するに至つたのです。

かゝる傾向が人の生活を質實にし、地上生活に十分の重みを置いて、そこに生活の凡ての動機と目的とを置くに至らしめた事は、見逃すべからざる功績であります。人は盲目な飛躍を試みようとはしなくなりました。可成り意地の惡い人間を、その儘尤大したやうな、奇怪な偶像神を葬り終りました。人間に人間以上の權力や意志を許すやうな迷夢から目醒めました。民衆全體の實際生活

の幸福が、より多く考へられました。是等の自覺と其の實行によつて、人々の生活は前の如何なる時代にも無かつたやうな、絶大な進歩を遂げました。その業績を我々は決して忘れることは出來ません。

此の狀態が直ちに當時の藝術にもさし響いた事は云ふまでもありません。自然主義的傾向の發生が夫れであります。この自然主義的傾向といひますのは、とりも直さず生活に對する純客觀的鑑照をさすのでありまして、藝術家は人生を如實に寫し出す所の、明鏡であるべきであるといふ主張であります。卽ち、自然律そのものゝやうな人間的の意志や感情から解放された、一つの力となつて、人間生活をあるが儘に再現するのが、藝術家の能事であると考へられるに至りました。かくして人の生活は、何等の加減容赦もなく、赤裸々に描き出されました。夫れは是迄に現はれなかつた新しい姿の藝術品を生み出すに至りました。私共は初めて自分自身の姿がどういふものであるかといふ事を、目の前にまざ〳〵と見せつけられて、驚きの目を見張らずには居られない强い刺戟をうけたのです。さうして私共の實際生活が夫れによつてどれ程啓發され訂正されたかは量り知る事が出來ません。今まで、高い道德であるかの如くに、公々然と行はれて居た諸々の僞瞞や、虛飾や、陋習やが散々に引き裂かれて、一味の清新な凉氣が送り込まれました。破壞さるべき多くのものは、惜しげもなく破壞されるに至りました。

併し乍ら、人間的の意志が否定されて、自然の力が極度に尊重され、生活現象そのものが自然の意志の獨斷的な表現として取扱はれるに至つた結果は、人生に對しての宿命的な約束が、自ら成立ちました。ある情け容赦のない大きな力、その力が人間の生活を勝手氣儘に導いて、人間は如何に努力しても、もがいても、結局その圈外に脫逸する事は出來ず、その大きな力なる運命の傀儡として存立するの外はないといふのが、自然主義の藝術からひとりでに歸納され

得べき結論であります。その結果として、私共の生活には、自主的な能動的な力が段々と失はれて行き、一種の諦めが人々を壓倒するに至りました。さうして、人間の精神活動はひとりでに鈍くなり、弛るんで來ました。その結果、人生は何等の感激もない、灰色な世界の中に成立つて居るといふやうな勢を現はすに至つたのです。

若し、自然主義の認める所が眞であつたならば、縱令、その藝術及びその藝術によつて影響される所の人間の生活が、如何に灰色になつても仕方のない事ではありますが、どうしても、その境地に滿足の出來ないやうな衝動が、人間の中には潜んで居るのです。夫れのみならず、人間が自然の意志をその儘歪める事なく、表現しようといふのは、云ふべくして行はるゝ事ではありません。そこにはどうしても個性の各々が持つて居る持味といふやうなものが、泌み出て來るものです。自然主義の藝術がもつこの欠點と、人の心の中にある、自然の意志にのみ絶對的に服從し得ぬ心持とが一緒になつて、此處に新しい展開が行はれるやうになりました。

物を見、知り、覺るのは結局、人の各々がその人の有する腦力に從つて企てる所である。これは動かすべからざる事實であります。そこから、新しい出發點を求め出さうといふのが、卽ち、新しい展開なのであります。此の事は、藝術方面に起つたのみでなく、他の方面にも同時に起つて來たのであります。例へば哲學の方面で、マックス・スティルネルや、ニーチエや、ケヤケ・ゴールドや、ある意味に於てショウペン・ハウエルの如き人達が、企てた所のものは、卽ちこれでありまして、輓近にはプラグマテズムの人達や、ベルグソンなどの所說が實にその代表的なものになつて居ります。夫等の人は、概念的なあるアイデイヤによつて人生を律しようとする事なしに、人生から出發して、ある概念に到達しようとしたのであります。といふよりは、個性の見性から出發したといつた

方が、より當然であるかもしれません。ベルグソンの如きは、人間を研究する上にも、延いては存在の本質を研究する上にも、科學がどうする事も出來ない領土(夫れが哲學の本當の領土であるのだが)があるといふ事を主張し、極めて鮮明な微妙な論理をもつて、それを結論したやうに見えます。かくて科學的の唯一の論理學であつた歸納法は、新しい意味の演繹法によつて置き換へられるに至りました。社會科學の方面にも、同じやうな試みはどん〳〵發展されました。歴史學、政治學、法律學等の如きてさへ、その論理の基礎には個性といふものゝ要素が著しく、色濃く加へられる事になりました。又宗教の方面に於いても、ドグマよりも個性が持つて居る信仰の内容そのものに、重い價値をおくやうになつたのは、周知の事實であります。固より、かゝる運動に對して反對の運動が起り、それが現代に於いてある力強い反抗をなしつゝあるのは、もとより免れませんから、凡ての人間生活の現象は、私が今申し述べたやうに、明瞭に區別されて居る譯ではありませんけれども、個性に立脚した考へ方が、漸次地歩を占めつゝあるのは、疑ひのない事柄であると信じます。

さて、此の氣勢が藝術の上に如何なる働きをなしたかといふと、前にも申した通り、夫れは藝術制作の對象を全く顚倒した事です。自然主義に於いては、自然が人間を見るやうにと企てられましたが　新しい運動に於いては、人間が自然を見るやうにと、企てられて居るのです。固より、人間と云へども自然の廣義なる自然の一部であるのに相違ありません。しかし、藝術制作の主體は廣義なる自然ではなくして、人間そのものです。犬でもなければ、羊でもありません。その主體が人間である以上、人間は夫々、自己獨得の主觀によつて、藝術を創作する外はありません。即ち、主觀的なる個性の中から、湧き出て來る純粋な衝動が働く所に藝術は成立つのです。この約束は、どうしても變へる事の出來ない約束であります。若し、これが變へる事の出來ないものであるなら、

いづそ、そこに固く立脚して、藝術を作り出さうてはないかといふのが、新しい態度なのてあります。夫れ故に、自己の内部に對する考察が、前にも勝つて重んぜられなければなりません。そこに深く食ひ入り、強く把掴した人が、力強き藝術を生み出すのてす、即ち、人間の意志がこゝに再び復活するに至つたのてす。即ち、タイバーの河水が、慢然として汲み上げられるのてはなく、その河水をつくり出す泉の各々が、その水の湧き出る一番の深みから探り出されるやうになつたのてす。換言すれば、人間の持つて居る藝術的衝動、即ち、本能が人間の生活、延いては人間をとり圍む大自然に對して、如何に働きかけ、如何にそれを變化するかを、見極めようとする努力が始まつたのてす。

凡てのものは、一つの處に止まつては居ません。それは、常に流動し流轉して居ます。人間も亦、現在の境遇にのみ止まつては居ません。何等かの方向を目指して、進化にしろ、退化にしろ、動きつゝあります。さうさせるものが、

縱令、廣義の自然の持つて居る力てあるにせよ、それが人間といふ生命の中に流れ込んて働く時には、人間といふ立合から見た場合、それは獨存的に、人間の中にあつて働いて居る唯一の力てあります。人はそれに凡ての依頼をかけて生きて行く外はありません。この力こそは、私が前々から繰返して申述べた本能そのものてあります。これが、生命の泉てあり源頭てあります。各個が一つの泉てあり、その泉から流れ出る水が、各々違つた性質を持ち乍ら合流して一つの河をなします。その河こそは、我々が形造つて居る社會てあります。この外にこの河の本質を作り出す要素は本當はありません。雨や雪が地表に溜つて水の量を增す事があるとしても、夫れは、長い日和の後には當然失はるべき水量てあつて、河の本質的な水量はいつても、常住不變な泉の水によつてのみ供給されるのてす。だから、私共はこの泉を尊び重んぜねばなりません。此處から恐らくは、未來に於いて新しい人間生活の力が湧き上るてせう。

羅馬の郊外なる靜かな村の傍に湧くアックワ・アチエトーザ、たゞ一度、假初に訪づれた泉ではありますけれども、それは一人の人の心に觸れ得たやうな溫い忘れ難い記憶を私に刻みつけます。あの泉は、今日も今のこの瞬間にも、少し許り酸味を持つた清い水を湧き立たせる事を止めては居ないのでせう。

美を護るもの

有島武郎

ラヘルの傳をお讀みになつた方は、私の今日お話する所から、何も新しいものを得られないのでありますけれど、此の本をお讀みにならない方、或はお聽きにならない方の爲めに、私の考へ合せたことからして、それを御紹介して見たいと思ひます。

此の書物は一九一三年であるから、今から八年前にエレン・ケーの書いたものであります。此のラヘル・バルンハーゲンといふ人の評傳或は其の人の手紙を集めたものは、既に澤山出て居るのでありますけれども、私はそれを一つも讀みませぬ。從つてラヘルに關する私の知識は、全部エレン・ケーの此の評傳から受けてゐる譯であります。御承知の通りエレン・ケーは近代の女性思想家と

して勝れた特色を有つてゐる人てあります。ラヘルとは一味の共通點を有つてゐますから、其の評論は非常に興味のある且つ有益のものてありますが、私は敢てエレン・ケーの意見を其の儘に御紹介するのてはない。此の書物の内容にある事實からして、私のみの考を申述べて見たいと思ひます。

有名な佛國の女流革命家マダム、ド。スタールといふ人は、ラヘルから見ると丁度十五の姉に當つてゐます。ラヘルは、一七七一年の五月十九日に生れた人てあるから、日本の暦ていふと、明和八年後桃園天皇の卽位の年て、又露西亞軍がクリミヤを占領した時に當つてゐます。生れた處は多分ベルリンだと思ひます。一七八九年ラヘルが十七歳の時に父が死んて居ります。一七九五年二十三の時に、カルヽス・バアドて始めてゲーテに會つてゐます。此の時ゲーテは四十五歳。ゲーテに對するラヘルの親愛と崇敬は生涯のことてあるが、ゲーテに面接したのはこれが初めてあります。一七九六年二十四の時に、カールフォン・フインケンスタインといふ伯爵と知合ひになつて結婚の約束をしました。それから其の約束が四年間續いて、一八〇〇年二十八の時に其の婚約が破れ、それから一八〇二年三十歳の時に、西班牙の公使館附になつて居たドーン・ラファエル・ダルキーオといふ人と戀愛關係が起り、而して其の關係が一八〇七年即ちラヘルが三十五歳の時まて五年間續いたけれども、不幸にして此の關係も破れることになりました。而して其の後に他日自分の夫となつた所のバルンハーゲンといふ人との交際が始まり、而して此の交際は一八一四年ラヘルが四十二歳の時まて續いて其の年に愈々結婚しました。バルンハーゲンといふ人も外交官てあつたから、任務の爲め彼處此處に往つたり來たりしておつたが、ラヘルは頻りに生れ故郷てあるベルリンに歸りたがつておつた。一八一五年四十三の時に、フランクフォルトに往つてゲーテに會つてゐます。一八一九年四十七の時にベルリンに歸ることが出來て、其處にサロンを開いて、而

してベルリンの知識階級の人々の社交上の一の中心點を造りました。一八二五年五十三の時に又旅行して、ワイマーてゲーテに會つてゐる。其の時ゲーテは七十五歳であつた。それから一八三三年六十一歳の時に健康を損じ、段々衰弱して遂に三月七日夫に先立つて死にました。それは結婚後十九年目のことであります。

ラヘルの生涯は割合に外面的に單調て、ざつと今申上げたやうな次第てあります。ラヘルの死んだ年は一八三三年てあるから、今から見るとざつと百年程前に當ります。此の百年程前に生きて居つた一女性のラヘルが、人生或は自分の生活といふものに對してどういふ風に生活をして居つたかといふことを考へて見ると、これは現今のやうに婦人問題或はもつと適切に云へば人生問題といふやうなものを色々に考へておられる人々の爲めに、非常に意味深い參考にならうと思ふのてあります。

前に申した通りに、マダム・ド・スタールはラヘルよりも十五歳の姉さんてあり、又佛蘭西の有名な小說家てあるジョージ・サントはラヘルよりも二十四歳の妹てあり、それから英國の女流創作家てあるジョージ・エリオットは三十三の妹、それからエリサベス・ブラウニングは二十八の妹に當つております。マダム・ド・スタールを除くの外の當時の女流思想家の總ては、ラヘルよりも年が若いのてあるから、ラヘルといふ人が可なり古い時代に屬する婦人てあつたといふことを考へられるのに拘はらず、此の人の生活なり思想なりに新しき時代に刺戟を與ふべき多くのものが含まれてをります、此の點は非常に注意せらるべき點てあらうと思ひます。

先づ生立ちからいふと、ラヘルは不幸にして猶太人の家庭に生れました。御承知の通りに猶太人は日本て云つて見ると、先づ新平民とてもいふべきものてあつて、十八世紀時代の歐羅巴に於ては、色々壓迫を以て見舞はれておつた所

の種族である。フレデリック大王や、猶太人であるメンデル・ゾーオンといふやうな人々が、猶太人に對する歐州人の僻見を破る爲めに色々努力をしたけれども、矢張り一般人の此の人種に對して有つておつた所の輕蔑と憎惡といふものを打消すことが出來なかつた。ラヘルはさういふ境遇に生れたのであります。併しながら由來猶太人は總ての方面に於て非常に能力の發達した人種であからして、ラヘルの父の仕事も相當に榮えてをつたやうであつて、ラヘルは先づ中流以上の家庭の第一番目の娘として生れました。處が身體が非常に虛弱で生れた時に箱の中に入れて、之に綿を詰めて溫めてやつて、漸く育て上げた位であります。而して段々生長して物心つく頃になつて、自分の種族が歐羅巴人の僻見の爲めに非常に惱まされて居るのを見、此の先天的の逆境を痛切に身に感じてをつたらしい。ラヘルは自分自身の境遇を顧みて斯ういつております「私は此の世の中に生れた時から、天外の神からして身に鋭い刄を刺し透されて來てゐる。而して神は次のやうな言葉を私に言ひ聞かせた。お前は今僅かの人しか見えない程に深く世の中を見よ。又私はお前が有つて居る偉大なる尊貴なる休むことなき思想を奪ふこともしまい。併しながらお前が猶太人の女であるといふ其の一事だけは、私は取り除くことをしないぞ」と斯ういふ言葉を受けて而して身に鋭い刄を刺されて生れて來たやうなものだといふことをラヘルは云つてをります。さういふ風にラヘルは自分が苦しんでゐるやうに、此の境遇はラヘルの快濶な精神に一片の雲翳を投じて居つた。

それにラヘルは除り容貌の美しくない人であつた。男としては容貌は大した問題ではないが、女に取つては我々男子に一寸考へられないやうな一つの重大な問題と見えます。ラヘルのやうな人でも、此の問題の爲めに可なり惱んだ。「私は美くしい心、軟らかな心臟を有つて生れて來たけれども、私の容貌が勝れない爲めに、新しい世に顯はれることが出來ない」と、歎じてゐる。併し公平に

見て、この書物に載せられてゐるラヘルの肖像から見ると、決して自分で悲觀してをつた程美しくない女ではなかつたやうであります。ある人の言葉に據ると、ラヘルは非常に身柄の小さい細々とした、併し如何にも確かりと出來た體格であつて、而して顏の廻りには、黃らいつや〳〵した髮の毛が潤澤に生え、而して非常に小さい美しい手と足とを有つてゐる女である。而して驚くべきことは其の人の目である。其の人の目は一種の光りを以て輝いて、人を見詰める時にその人の肺腑を貫くやうに見える。又同時に驚くべきは其の人の聲であつて、張りのある而して響きのこもつた實に何とも云へない聲で、其の人の話を聞いて居ると何時までも聽かなければ氣が濟まないやうな感じがする。其の話す言葉は優しい立派な床し味を有つたものであるけれども、其の中には鋼鐵の如き力があつて、假りに人がそれを動かさうとしても、思ひも寄らぬといふ感じを與へた。さういふ風に……と容貌態度を書いてゐるが、それで見ても決して醜いといふやうな婦人ではなかつたやうに思はれる。併しラヘル自分自身の心持では、決して美しいものとは思つてゐなかつた。自分の有つて生れて來た其の內容から考へるならば、自分はもつと〳〵美しい女でなければならぬと思つたに違ひない。少くともラヘル自身が感じて居つたやうな美しい心を蔽ふ所の器として、決して完全の器でなかつた、からラヘルの深く思ひ込んだ結果が、ラヘルの精神に多大の影響を與へてゐたやうに見へる。實際上に擧げたラヘルの容貌の記述にしても外形的な容貌よりも、內部から漲り出たものによつてその外形が美しく活かされてゐたことだけは思はされます。

それからもう一つラヘルの若い時に苦しめられたものは、其の父と母及び兄弟がラヘルに對する態度であります。彼等はラヘルの本當の精神の傾向を理解することが出來なかつた。殊に父は猶太人に通有なる極く外面的の政策的見地からして、自分の娘の生ひ立ちを見守つて、自分の思つてゐる鑄型通りに娘の性

格を嵌め込まうとした。併しながら強い性格を有つて生れて來たラヘルに取つては、それが殆んど許すことの出來ない程の壓迫として感ぜられた。父はラヘルが十七の時に死んだけれども、それまでラヘルは父の爲めにどれ位苦められたか知れない。ラヘルは殆んど死ぬまで父から受けた所の傷が癒えなかつた。母は父程の人ではなかつたけれども、矢張りラヘルの理解者としては甚だ無識の理解者であつた。其の爲めラヘルは母から別居して住むことを餘儀なくせざるを得ない程になつた。所が母が病氣をしてそれが段々重くなり、而して自分の娘に對して何となく戀しがつて來たといふことをラヘルが感ずるとラヘルは隔たつた所に居て忙しいにも拘はらず、萬事を打棄てゝ毎日母を見舞ひ、有らん限りの力を盡して心から母を慰めました。其の親切の樣子は實に隣人を動かすに十分であつたといふことです。ラヘルが母に對する記憶は實に美しいものであつた。ラヘルは一體大變優しい心を有つてゐたけれども、其の心が非常に誠實である爲め自分の感じたことを僞つて濟ますことが出來なかつた。それであるから此の人の親に對する感情、兄弟に對する感情は皆非常に優しいに拘はらず、父の仕向けに因つて生涯癒やすことの出來ない傷を殘してしまつたものと見えます。

兎に角此の人種的偏見と容貌の美しくないこと、父母の自分に對する不理解と、此の三つのものがラヘルの性格に對して非常に强き打擊を與へました。ラヘルは自分自身で云つてゐる通り、自分は生れ出てゝ生といふものを十分に樂しみ且つそれに信賴することの出來る傾向を有つてゐたに拘らず、此の三つの壓迫の爲めにそれが打碎かれて、單に平和にこの世を過して行かうといふ消極的態度で、生活に向はなければならなくなつたと。それであるからラヘルが初めに夢想したやうな華々しい生活は、遂に一度もラヘルの上には來なくなつてしまつたのであります。即ちラヘルの本來の明るい性情が虐げられ踏み躪じら

れ、而してどつちかといふと東洋的な、內部生活にのみ重きをおく、沈んだ靜かな生活になつてしまつたのであります。ラヘルは斯ういふて居る「自分はバラドックスのやうだ。丁度根こぎにされた木が、誤つて根からでなく梢から先きに地に埋められたやうだ」と。而して自分の性格の曲つたのを歎いております。而して若い時に受けた此の癒やすべからざる心の傷は、機會ある毎に心の底から現はれて來る。ラヘルはさういふものに虐げられるには、餘りに多くの誠實を有ち、餘りに多くの生命力を有つてをりました。其の虐げられた傷は何時までも癒やされないけれども、其の傷の爲めにラヘルの人格は美しい光彩を添へるに至りました。ラヘルといふと、エレン・ケーも云つて居る通りに、ブリーディング、バーソンといふ言葉があつて、それは一遍傷を受けると、幾ら治つても動もすると傷口が破れて其處から血が出る體質を有つた人のことであるさうだが、丁度ラヘルはさういふ人でありました。一遍受けた傷はどうしても癒えない。折があれば其の傷から始終痛みが來て、生涯忘れることが出來ない。ラヘルが「天才といふのは、卽ち記憶力の强い人である。忘れることの出來ない人のことである」といつてゐますが、ラヘルを若し天才でないとしても、少くとも忘れることの出來ない人であつたのは確かです。ラヘル自身で戀人にやつた手紙に、「私は物を受取らない時には忘れもしよう。併し一度受取つた上は決して忘れない。此の事實を貴君はどうぞ蔑視しないで貰ひたい」といつて居るが、ラヘルには他人に取つては何でもないと思はれることも、非常に深い印象となつて其の胸に殘つたのです。我々には少し誇大のやうに思はれるけれどもラヘル其の人に取つてはそれが自然であつたに相違ありません。

ラヘルはかゝる事情の下に特種な性情を養成しました。ラヘル自分自身で私は一人のハムレットである。併しハムレットよりも、もつと生き〳〵した、而して華やかな、而してもつと髮の毛の黑いハムレットであるといつてゐる。ラ

ヘルには本當にさういふ所があります。此のやうにしてラヘルは外面的に働らき掛ける力を遮ぎられた結果、其の生活は何處までも内面的になつて行きました。隨つて前に申した通り、外面的に際立つた生活もせずに一生を終つたけれども、其の内部に起つた色々の思想の發露は、却つて深味を加へ廣さを增してゐる感があります。

ラヘルは又何物にも增して誠實を尊んだ人であります。誠實を尊んだ故に又獨創を何物よりも尊んだ。而して獨創のある所には殆んど總てのものを許さうとした。誠實は人格を造り上げる所のものである。人格は單に能力或は洞察力だけのものではない。天才は能力或は洞察力のみで許すことが出來るけれども人格はそれだけでは足りない。人格は簡單に云へば、總て自分自身の發明した所を一の統一の下に置き、而して其の統一した所からして、全く自分自身の思想を作り出し、其の思想に依つて生活する所のものが即ち人格である。

それで此の人格に依つて能力或は洞察力が更に統一せられた時に、始めて其處に獨創力が起つて來る。人間の唯一の獨創力の起る所は、人格的誠實でなければならぬといふことを、非常に強く自分で考へて且つ實行してをつた。而して「誠實に自分で尋ねて自分でそれに答へようとする所のものは、常に實在に心を着けて物事を自分で發明せねばならぬ。望むものを求むるには、誠實といふことが總てに向つて必要なものである。誠實で且つ親切で、横しまならぬ心を持つといふことは、藝術家に取つても、又人間としても、一の友達としても、家庭の一人としても、公人としても、事業家としても、或は支配者としても、最大に必要のことである。若しこれが無ければそれ等の人々たることが出來ない。我々に必要なことは、何よりもまさつて眞理を愛することである。處が之をしないのは我々の今の社會の風潮である。我々の魂の萎縮するのはそれが原因である。若し誠實といふことがあるならば、決して我々の社會にさういふ病氣

が入つて來る筈がない。併し此の眞理を愛せんが爲めには、無限の勇氣が必要てある。若し人が自分て斯うならうと願ふ所のものになることが出來かつたならば、其の人がどんな人てあらうとも、どんな力があらうとも、それは何の役にも立たないてはないか」といふやうなこともいつてゐる。誠實てあれ、さうすれば人は必ず本當の眞理を収つ捕へることが出來る。つまりラヘルがゲーテを批評して、總ての人は多くの眞理を有つてゐる、併しゲーテは眞理そのものを有つてゐるといつて、深くゲーテを尊敬したのは其の故てあります。又斯ういふことを云つてゐる「人が誠實てあると、其の誠實てあることが人に健康を與へる。それてあるから眞理を有つて居ないものは老ゆる。人を老ひしむるものは顔の皺ばかりてはない」と。此の心持ちがラヘルの生活の根柢にあつたことは云ふまてもありません。此のやうにしてラヘルは外面的の色々の約束に依つて自分を縛りつけることの代りに、自分の心の中に本來動いてゐる誠實といふものを何よりの便りにして、自分の生活を導いて行かうとした。其の爲めに彼女の生活は屢々普通の意味ていふ見榮の宜い體裁の整つた形から見ると、道を踏み外したやうに見へる場合が非常に多いけれども、少しく立入つて考へて見ると、彼女の行爲が常に誠實を以て裏附けられてゐることを發見するのてす。

其の次にラヘルの人物を造つた第二の特色は、個人主義といはうか、個性主義といはうか、それが重きをなしてゐるのてあります。此の個性の尊重といふことは、我々が見る所の新しい時代を生み出した一つの大きな源動てあると思ふ。エレン・ケーに依ると、此の考を最も具體的に現はしたのはゲーテてあるといふ。兎に角ゲーテを始めとして當時のロマンティストの考への根柢には此の個性尊重といふものが力强く働いてゐたのてあります。生活といふものを考へて見ると、我々はちやんと此に一つの存在があり、我々の廻りには又社會とい

ふ存在がある。此の我と社會とをどういふ關係に於て結びつけて生活しなければならぬか。世の中を眞面目に誠實に考へるものは、これが直ぐ問題になつて來ると思ふ。近世の唯物史觀から出發した所の社會觀人生觀に據ると、我々の生活は社會生活或は環境といふものが綜合されて出來上つたもので、個性の本然的內容といふやうなものはない。個性は結局社會或は環境の生じたものだといふ風に考へられるけれども、併し能く考へて見ると、唯物史觀の立場からいつてもそれは正しい觀察でないと思ふ。例へばマルクスは唯物史觀を作つたけれども、彼が當時の資本主義制度から解放されてゐなかつたなら、あの人の社會主義卽ち無資產階級の爲めに社會を改造しようといふ心持ちが起つて來ないだらうと思ふ。成程マルクスの時代に無資產者に對する同情ある思想があつたから、さういふ思想が一つの根據となつてあゝいふことになつたと考へられないことも無いけれども、併しマルクスの時代にあつては何んといつても資本主義が社會生活の主潮をなしてゐた。卽ち資本主義の思潮若くは反響といふものが一番力强く働いてゐた時代であつたに相違ない。マルクスが若し社會生活の主潮にのみ動かされた人であつたら、資本主義的生活の改善を心懸けるのが然るべき成行きである。然るにマルクスがあゝいふ思想を生み出したといふことには、私は矢張りマルクスの個性的の力、個性的の要求が時代の思潮を打破つて働いてゐたと考へざるを得ません。マルクス自らはその成行きを環境から起つた外部的影響のみから來たといふやうに或は考へてゐたかも知れぬが、マルクスの內部的情操が外部の壓迫を打破つて働かなかつたなら、決してあの思想を生み出さなかつたと私は思ふのであります。生物學にも突發的變生の事實があつて、或生物が境遇の如何によつて變化して行き、色々種類が分れ形體が變つて行く……人間にもさういふことがあらうと思ふ。要するに個性の情操といふものが非常に重きをなすといふことは、決して否むことが出來ない。此の

マルクスの唯物史觀的な環境說が丸て行はれない時代、卽ち個性の要求が尊重されて然るべき時代に於て、却つて個性といふものが蔑視されて居つた。處が十八世紀の終り頃から、個性に對する要求が非常に强くなつて來た、而して其の要求はゲーテを始め若いローマンチシズムの人々に依つて固く主張せられたが、ラヘルも其の一人てあつた。ラヘルの要求は何てあるかといふと、外界の羈絆から自分を救ふことてあるから、彼女は何よりも自然といふものを尊んだ。ラヘルは言つて居る、「私は子供の時代から、自分の內部生活は眞理に應じて豐かなものてあつた、自然は私の心といふ鋭いオルガンの上に親切に其の指を動かした」と、ラヘルは又自然を尊んだ結果、誠實なる考へ方から人間の作つた約束を破つて、豐かに動いてゐる所の自然の邊に行かねばならぬといふことが、其の考へ、への根柢になつておつた。

ラヘルはさういふ風に世の中にある所の僻見或は傳說といふやうなものには非常に自由てあつて、少しも束縛される所が無かつたから、一般に受取られて居る道德に關する考へも、亦人と異なる所があつた。今は段々さういふ考へを有つて居る人もあるやうてあるけれども、少くとも其の時代に於て、さういふ考へは餘り澤山無かつたのてある、ラヘルの考へては、人間の生活は常に變つて居る所の生活てある。常に變つて常に發達して行く所の生活てある。我々は此の發達して行く力を少しても途中て阻礙するやうなことがあつてはならない。此の生命力を澤山有つてゐれば、總ての變化と發達は容易なものてある。然るに普通にいふ道德の世界に於ては、此の發達といふことが非常に狹く局限せられてゐる。道德は一つの標的を作つて、其の標的を不動の眞理てあるとして、それに向つて我々の生活を結びつけようとするものてある。さういふ風に作り上げられたる道德は、人間の內部的の力の發達を阻礙する傾向のあるものてある。「生命といふものは、決して死んだ所を繰返してはならない、洞察を透して洞

察にまでの發達てある、此等が人間の生命てある」と、ラヘルは主張しておりま
す。此の觀念から、例へば自殺といふ問題に就いても、ラヘルは決してそれを否
定してゐない。詩人のクライストが自殺した時に、周圍の人々は其の行爲に對
して大抵非難を加へた。其の中にラヘルだけは毅然としてクライストの自殺を
肯定した。而して云ふには、「私共は或は飛んで來た所の石、或は偶然に外れて
來た弓の矢、さういふ我々とは直接内部的の關係の無い出來事に因つて死ぬこ
とがあるてはないか、それすら人は已むを得ないことゝして許してゐるてはな
いか。然るに我々は自分自身て選んだ力を以て、自殺を遂行する時に、それが自
已内部と必然的の關係ある力を以て行はれる時何故惡いか。それは石や矢に中
つて偶然に死ぬのと違ひ、もつと根柢のある行爲てある」といつて、クライス
トを辯護してゐる。又虚僞といふことに對しても、普通人の考へるやうな考へ
方はしなかつた。「虚僞は自分自身に之を選んだ時は正當なものてある。それは
我々が有つて居る所の自由の一つの條件てある。併しながら外部から強ゐられ
て虚僞をした時には、我々は始めて墮落するのてある。」自分から進んてやつた
虚僞は虚僞てはない、自殺もそれと同じく、自分から進んて生命を拋つのは非
難すべからざる行爲てある。他から強ゐられて自殺するのは耻づべき自殺てあ
る。斯ういふ風に自殺や虚僞の問題に對しても、ラヘルの考は極めて自由てあ
つた。それから正しいといふことに就いては、「總てのことに就いて正當てある
ことは自分其のものを失ひ去つた時てある、自分自身を失はない時は總ての點
に適合するやうに行爲を仕向けることは出來ぬ」といつてゐる。
それからラヘルは心の問題に非常に重きを措いた。彼女は女としては珍しい
程理智的な人てある、如何なるものても道理に據つて判いて行かなければ氣が
濟まないやうな鋭さを有つてをつた。人を見ることに就いて、自分自身如何な
る人ても一度面會すれば、此のことはどういふ風に行くかと見拔くことが出來

た。其の位理智的な働きを有つてゐる人であつたけれども、それにも增してラヘルの尊重したものは心臟即ち心である。或女がラヘルの所に來て、自分が或男に戀をして、而して其の戀を打明けた時にそれが退けられた。自分は退けられることを知りながら、それを打明けなければならなかつたといふことは、何といふ馬鹿〳〵しい不名譽であつたらうと告白した時に、ラヘルは如何にも馬鹿〳〵しいことかも知れぬが、どうして不名譽であるか、ちつとも不名譽でないと色を正して云つたことがあります。ラヘルは云つてゐる、「心が動かされる場合に、我々は其の心を支配する所の力を有たない、心臟は柔かい肉と血で出來上つて居る、それをどうして人間の力で鋼鐵に變へることが出來ようか」と。其の位心の問題に對して纖微な思ひやりを持つてゐたのであります。

ラヘルは女の友達が如何にも澤山あつたけれどもどつちかといふと妙な友達が多かつた。即ち世の中から非難を受けるやうな戀愛關係を作つて居る人が多かつた。例へば伯爵夫人ジョセフヒン・バクタの如きは、其の夫を棄てゝメーノーといふ地位も無い男と結婚した爲めに、自分の高い位地と名譽とを棄てゝ、而して世の中からは淫らな慢心した女といふ謗りを受けた。これはラヘルの一番親しい友達である。何故ならば此の人は自然の一番深い要求に應じて、社會的位地よりも心を重んじたことを知つたからである。それからドラ・メンデルゾンといふ人は、夫と長い間別れてをつて、遂にシレーゲルといふ人と自由に同棲した人である。此の人もラヘルと大變親しく交際した。それからォーガスタ。ブレーデルといふ女優は、ベンタイムといふ伯爵とこれも自由に同棲して、公けの結婚をしないで過した人である。此の女優も始終ラヘルの許に出入りして大變歡待されてゐた。ラヘルの交際してをつた人は、斯ういふ種類の人が多かつた。つまりラヘルの考へは、斯ういふ人達が本當の心の要求する誠實に忠實であるといふこと、それがラヘルに取つては何よりも有難かつたからであります。

ラヘルは親しく此の人達の相談に與かつて、メンデルゾンが外國に逃げることまで悉皆世話してやりました。それから男の友達にも隨分面倒を見て色々のことをやつてをつた。隨つてさういふ人々は、ラヘルの所を自分の行ひに對する懺悔所のやうに思つてをり、ラヘルも非常に之を可愛がり同情しました。

ラヘルの言葉に、「愛といふことは我々の生活を豊富にし光明的にし、意味を深からしむるものである。愛を通じてのみ人は自分の存在を知ることが出來る。愛は人生の中核なるが故に、其の類似も亦我々の同情を惹起すに足るものである」といつて居る。其の意味でさういふ人を受入れたものと思ひます。

ラヘルは又年老つた連中が若い人に對して、單に自分の經て來た經驗を以て其の行爲を束縛しようとすることに、或不快を感じて居つたやうに見へる。「若い人は迂つかりすると間違ひがある、思慮分別といふものが要ると年寄りはいふが、人は生命の源卽ち愛を味ひ盡さない内は、思慮分別はどうして出來ようか。年寄りは頻りに經驗々々といふけれども經驗だけで決して尊いものでない。其の經驗に依つて本當の思慮分別が叩き上げられた時に、始めてそれが尊いのである。單に思慮分別といひ合理性といふものは、大抵の場合それはウキズドムでなくして、勇氣の缺乏である場合が多い」といつてゐる。ラヘルはさういふ風に若い人の心持に能く共鳴してをつた。けれどもラヘルは何時もいふ通り、誠實を決して忘れたことはない、强い誠實は生活の根柢でなければならぬといつてをります。それであるからラヘルは隨つて戀愛の自由といふものを一個の道德として主張し、我々は力を盡し之を擁護しなければならぬといひ、愛なき性的關係を不貞操として極端に非難し、力を極めて之を叩き壞さなければならぬと云つた。隨つて現在の社會に行はれて居るやうな結婚制度に對しては、何等の意味をも見出さなかつた。「これは惡制度である、我々人間は段々に墮落して、我々自身の愛を互に告白する時に、坊さんと役人の前でしなけれ

ば安全でないと感ずるやうになつてゐる。彼等は自分自身の心に其の墮落を知つてゐる、自分の愛は非常に怪しいのである、つまり愛なき性的の關係を結ぶ不安を有つてゐる。であるから誰か證人を得て證據立てないと、破綻が起るやうになる。そこで坊さんと役人を賴んで豫防的にさういふことをするのである。さういふ結婚は何等の意味もない、怪しからぬ習慣である。其の墻壁を除けよ。此の有害な習慣を地面が平になるまで踏み蹂れよ。其の後に始めて本當に生命のあるものが榮えるに至るだらう。今の世の中は、奴隷制度と戰爭と結婚制度と此三つのものが社會の下底を彷徨ひ歩いて、色々繃縫しつぎはぎしてゐるのである。結婚制度は是非自由に理想的にしなければならぬ、さうすれば坊さんや役人を證人として、不安の關係を結ぶ必要がない」といつてゐる。

此の次に起つて來る問題は子供の問題であります。ラヘルは法律的に正當と認められ或は不正當と認められる所の子供に對する觀念を全然除かなければならぬと主張した。つまり正式に結婚をしない間に生れる私生兒のことであるが、ラヘルは生れて來る子供には兩親の有つてをつた所の失策が傳へられてはならない。法定の結婚式を擧げない子供を私生兒として、社會から虐遇せられるやうな憐れは、どうしてもあるべき筈がない。斯ういふ考へ方は一日も早く社會から除かなければならぬといつてゐる。それから其の子供はラヘルの說に從へば父の姓を繼ぐよりも母の姓を繼ぐべきものである。而して母は其の子供の爲めに生みの親でなくても良き父を選んでそれを養ひ親とするのが正當である。さういふ風にして子供を育てるのが一番好いことであるとラヘルは云つてをります。

それから宗敎といふものに對しては、私は思ふにラヘルは宗敎的であつたと思ふ。凡そ心の最も誠實な人であつて、宗敎的といふことが出來なかつたならば、渴仰的でない人はない。ラヘルが眞實の人であつたといふことを若し人が

許すならば、ラヘルが同時に渇仰的の人であつたといふことも許さなければならぬ。併しながら彼女は普通稱せられてゐる所の宗教といふものに對しては、全く超然たる態度を取つてをつた。シラーが自分は宗教的の動機から、宗教の信仰といふものを公言しないと云つたのと同じ意味で、彼女は宗教に對して超然としてをつた。又ゲーテのやうに、基督の人と爲りには非常の尊敬を有つてをつたが、併し其の名に依つて立てられた宗教には非常に冷淡であつた。ラヘルは斯ういふことを云つてゐる。「基督教は人の心靈の發達の間に殆んど偶然に出來上つた處の一つの制度であつて、其の制度が既に餘り長く續き過ぎて、もう餘程前に絶滅して仕まはなければならぬ筈のものである」と。これは私の考へですが、一體宗教が一つの制度と結附いて、而して人に認められるといふことには明かに區別しなければならぬ二つの要素があります。一つは信仰其のものであつて、一つは其の信仰を取り守らうとする所の制度である。

併しながら此の信仰といふ生きたものと、制度といふ死んだものとの間には、迚も結び合はすことの出來ない深い限界がある。制度といふものは必ず固定した物質的の形を取つてゐる。併しながら信仰といふものは、何時でも動いた生きた精神的の形に於て存在してゐる。此の二つのものを強いて結びつけようとするならば、信仰が或程度まで物質化されなければ決して成立つものではない。併しながら聊かでも物質化された信仰は、もう信仰そのものの性質を失つてゐる。此の意味に於て宗教が制度化されるといふことは、實際に於て不可能であらねばならぬ。此の點は世の宗教に從事する人が十分に考へて見なければならぬ點ではないかと思ひます。ラヘルが基督教に對して此の如き言葉を吐いたといふことは、而も百年以前に於て言つたといふことは、私共に取つて決して價値の少いことではなからうと思ひます。

それからラヘルが其の同胞――隣人に對する所の觀念である。ラヘル自分自

身は猶太人であるから、人から、大變蔑視されたけれども、他に對しては非常に優しい非常に廣い考へを有つてをつた。第十八世紀から十九世紀にかけては歐羅巴の革命時代である。佛蘭西に共和國としての憲法が制定されたり、亞米利加に獨立戰爭が起つたりした時期であるから、歐羅巴諸國は實に混亂の限りを盡してをつたといつて宜いのである。丁度一七九三年巴里に大革命が起つた時に、獨逸の人々はこれで以て獨逸と佛蘭西との爭ひが多少緩和されるだらう。佛蘭西があんなに酷くやられたのは、獨逸の力が與つて多いといふやうな偏狹な愛國的の考へを有つてゐるものが大多數であつたが、ラヘルは佛蘭西革命の徹底的な信者であつた、どうしても此の革命に依つて自由平等といふやうな法則が生れて來て、人類を色々の不幸から救ひ出すに違ひないと固く信じてをつた。其の内不幸にして革命に因つて作られた佛蘭西の共和政は、ナポレオンの手に顚覆せられると、獨逸の若いローマンテストの人々すらも、其の勢に引込まれてナポレオンを崇拜し、帝王主義的の傾向に向つて謳歌するやうな場合になつたが、ラヘルだけは昂然として其の風潮に抗し、自分の有つて居る根本的の思想を變へるやうなことが無かつた。而して佛蘭西が革命を起した精神は決して一ナポレオン位によつて倒すことの出來るものでない、佛蘭西が一人に依つて治められるよりも、共同に依つて治められたいといふ思想は、根から拔くことの出來るものでないといつて、飽くまでナポレオンに反抗して佛蘭西人の有つて居る人類間の自由平等の精神を少しも疑はなかつた。而してゲーテのいふことは常に何でも信じて居つたに拘はらず、ナポレオンに對するゲーテの同情だけは信じなかつた。それたけラヘルは人類に對して信念が强かつた。尤もナポレオンが獨逸に攻め込んで來て、獨逸の獨立が大分怪しくなつた時に、ラヘルは正當の意味に於ての愛國者であつた。而して獨逸を危險の地より救ふといふことには大に盡力し、自ら進んで赤十字社の看護婦となつて、自分がどれ

だけ所謂新しい女として實際のことにも力量を持ち得るか、どれだけ優しく人を愛すことが出來るかを實證した。併しながら戰爭が終ると、國民が戰捷に醉つて盛んに國粹主義を叫んでゐる間に、ラヘルは人類の幸福といふ見地から之に反對し、戰爭を非常に厭がつて且つおそれて居つた。

それから憲法といふものに對しても、ラヘルは大變疑ひを有つてをつた。どうも我々が憲法を得られるやうになつても、本當の自由が果して得られるであらうか、丁度子供に親が飴を與へたけれども、疾うの昔に中味が無くなつて仕まつて、子供は皮だけを得たといふやうに、憲法其のものをさういふ風に考へてをつた。又其の當時既に行はれ掛つて居つた所の社會奉仕の考へ、それにもラヘルは條件附きて反對てあつた。先づ自分に對して忠實に奉仕することの出來ないやうな人が、どうして社會に奉仕することが出來るかといふのがラヘルの考へてある。從つてラヘルはサン・シモンの信者てあつた。教育された有產階級の人の中には何等の美德といものが無くて、却つて美德は常に民衆の中にある——教育されない所の無資產階級の中にあるとの考へなどにはラヘルは一概に同意しなかつた。隨つてラヘルの信賴する所の人は貴族てあると云つた。但し貴族とは Nobility を指すのてはなく Noble-mun を指していふのだ。決して概念的に階級を分けて彼れ是れいふやうなことはなかつた。さういふ風な考へてあつた。又ラヘルは常に人を愛して、自分の死ぬ暫く前に友達に逢つて、私は好いことを思ひついた、私が死んだなら私の墓の面に斯ういふことを書いて貰ひたい、それは「善き人々よ、若しも此の人類の上に、何か知らず善いことが起つたなら、あなたは其の喜びにつけて、どうぞ私の喜びをも顧みてやつて下さい。」斯ういふことを墓に彫りつけて貰ひたいといつて死にました。それてラヘルが常に隣人に對してどんなことを考へて居つたかといふことは、略ぼ想像がつくと思ひます。

それからラヘルは自分自身としては一つの大きな纏まつた思想も現はさなかつたし、又創作的の仕事もしなかつたけれども、彼女は其の當時の天才の間に火を與へ力を與へ、而して生命を與へて居つた。ラヘルは女性といふものに能く斯ういふ力があるといふことを感じて、而してこれは女性の一つの仕事であるといふ風に感じてをつたやうに見へる。斯ういふ女性として、十八世紀から十九世紀の初めに掛けて出て來た婦人の中に、ラヘルは殆んど隨一といつて宜いと思ふ。ラヘルは又特にゲーテに對して殆んど無制限の尊敬を有つておつた。ゲーテも亦ラヘルに二三度逢つた所からして、直ちにラヘルが異常の力を有つて居る女性であることを看取して、力强い所の稱賛の言葉をラヘルに捧げて居る。

ラヘルには澤山立派な友達があつた。例へばフヒテの如き、シユレーゲルの如き、クライストの如きシユライヤ・マヘルの如き、フンボルトの如き、ハイネの如き、皆當時の思想を導いた有名な人々であります。其の外或は詩人或は創作家或は藝術家等、種々の實力ある人がラヘルのサロンに出入して親しく交際し、皆ラヘルに對して非常に重きを置いて居つた。ラヘルは斯ういふ人々を、自分の美しい人格の力を以て其のサロンに引つけた。而して毎日夕方になるとサロンに近い音樂會や何かの會が濟むと、斯ういふ勝れた色々の人が皆ラヘルのサロンに集つて來て、ラヘルを中心にして、色々の話をして夜を過したのである。ラヘルは極く淑やかな能く氣の利いた一人の女主人として、皆んなの云ふことを興味を以て聽き、それに對する自分の意見を述べて批評することも屢々あつた。それが爲めに集つて來る人々は皆ラヘルから少なからざる感化を被つて其のことを銘々が明かに公言してゐます。

ラヘルは又家庭内の生活に於ても、極めて立派なるワイフであつた。自分の身體は弱かつたが、世の中に生れて出た上は働く人でなければならぬといふ意

味で、常に働くといふことが一つの特色であつた而して働くといふと、如何なるものに對しても有らん限りの力を以て働くといふ風で、家庭上の些末なことには餘り注意しなかつたが、一たび必要が生じて來ると、最も規則立つた敏活なる家庭の整理者であつた。バルンハーゲンが十九年間ラヘルと同棲した後に過去を顧みて云つて居ることに、自分の結婚生活は、一日〳〵に新たなる愛の燃生活を繰返したやうであつた。彼女の傍に居ると、自分は常に新たなる愛の燃え出るのを感じた。さういつて居る所から考へて見ても、ラヘルの家庭を整へる力が、どの位美しく働いて居たかといふことが想像される。母の病氣の時でも、臺所のことから寢床のことまで、殆んどラヘルの手一つで片附けて、少しも滯りを見せなかつた。彼女は實に社交上に立派なことをした許りでなく、家庭内の生活に於ても立派な細君であつた。又子供を非常に愛し、殊に教會などで子供に神學を授けるやうな不自然なことには反感を持つてゐた。ラヘルは小供を育てるなら、自分は子供に何も與へない、子供自身で見出だす所を母が手傳ふやうにする。其の外に子供に對して優しい愛と尊敬とを捧ぐべき道はないと考へてゐました。晩年には女の子を貰つて、それを非常に可愛がつて育てました。さういふ風にラヘルは母らしい有難い力を潤澤に胸の中に有つて居つた。併しラヘルは云つて居ります。人間といふものは家庭の勤めをする爲に生れたものでないと。だから奥さんなどが女中の惡口をいふと非常に腹を立てる。女中と雖も一人の女性だ、内のことをのみするだけで滿足し得るものではない。そんなことの出來る筈がない、僞だと思ふなら細君自身でやつて見るがいゝ。女中のやるだけもやれやしない。……そんな譯でラヘルは一つの家を整へる爲めに生れて來たのでないといふことを非常に強く云つて居ります。併しながら普通の細君よりも餘程偉らい働きをやつて居つたことは、前に述べた通りであります。

唯だ生活の外面からいふとさうてあるが。ラヘルの生活に就いて考へて見ると、最も大切なのは此の人に起つた戀愛問題てある。私は何かにも書いたことがあるけれども、貞婦二夫に見みへず――貞節の女は二人の夫に仕へない。それを引繰返して其の貞節を男に持つて來て、貞節の男は二人の女を愛しないとも云へますが、どつちから云つても宜いけれども、日本ては女の方て貞婦は二夫に見みへずといふことを昔から云つて居る。兎に角一たび戀愛を經驗したものは、再び經驗してはならないといふ敎へてあるけれども、私は何も經驗してはいけないといふことはあるまいと思ふ。經驗することが出來ないといふのと經驗してはいけないといふのと、其の間に大きな差がある。再び經驗することが困難だといふのは、これは事實として否むことは出來ないが、經驗してはいけないといふ道理は決して無い。舊い道德から見れば色々理窟もあらうが、人間の生活力といふ大切な力を無視するものてあつて、これ程馬鹿らしい無理なことは無い。それは一遍戀愛を經驗した人は、中々再び經驗することが出來なくなる。けれども初めて戀愛を經驗した時の相手といふものは世界中に一番理想的の人間てあるかといへば、これは疑問てある。廣く人に接する內に更に理想的の人が見當つたなら、其處に又新しい戀愛を經驗するのは自然てあると思ふ。けれども舊道德の敎へる所ては、さういふ心の起るのが罪惡だといはぬばかりの態度てある。此の世の中に受けて來た一番大切の人間の生命刀、これより大切なものが無いのに、それを自分で押潰して、丸て自分の子供を殺して仕まうやうなことをする。而して木の端しくれ見たやうな人間が其處ら中に出來上る。さういふ人は品行方正かも知れない。然し品行方正位が關の山位な人間になり終るのだ。深い强い生命力を有つたものは、そんなに極限せられた外部によつて左右されてはならない。もつと高い强い意義に於て働いて行かねばならぬ。一旦戀愛が破れたからといつて、何も外面に束縛されて死灰同樣の餘生

を送るに及ばない。人間としてはもつと本能的の力に忠實でなければならぬ。ラヘルはそんなことが出來なかつた、それであるから生涯の間に三度戀愛を經驗して居ります。私は此のラヘルのやり方を非難すべき理由を見出しませぬ。

近代に於て性的感情の上に一の特殊の現はれがある。それは何であるかといふと、男が自分よりも年老つた女を愛すること、これは今日日本に於ても少しづゝ起つて居るやうであるが、此の現象は歐羅巴に於ては餘程以前から既に起つて居つた。それはどうしてさうなつて來たかといふと、今まで男性が女性に對する要求は、主もに外面的に女性の有つて居る特長に置いてあつたのであるが、さういふ男性の要求に對しては、若い女が一番好い。併しながら近代人の要求はそんな肉的外面的の女性でなくして、もつと內面的な個性の人としての要求が段々發達して來た。精しく云へば、女性が特有する一つの美しき性格、男性には迚も求めることの出來ない女性特有の情調を男性が求め出して、來た。それを求めるには成熟期の前にある肉體のみの豐麗なる女性では不可能で全く一個の人として成熟した女性に於て始めてそれが發見せられる。若い男が女の肉體的美を追はずして、其の肉體の內に成熟した婦人の特殊性を求むる結果からして、自分よりも年上の女性を求むるやうになつたのではないか。エレン・ケーが云つて居るが、或はそれが一つの理由かも知れぬ。兎に角斯ういふ傾向は、歐羅巴の文明國に起つて來た所の著しい現象である。ラヘルの戀愛も其の通りであつて、前に申した通り三つの戀愛を經驗したが、それは女性の有つて居る性的感情の三つの階級を遺憾なく現はして居るやうに見へる。第一の戀愛の場合は、ラヘルは彼女自身の愛情に對する戀であつた。即ち戀を戀したのです。第二の場合に於ては、ラヘルが男性に對して有つて居る愛であつた第三の場合には男性の愛情に對して反應した愛であつた。此の三つは女性に通有に起る三階級であつて、ラヘルは皆それを經驗して居ります。

ラヘルが一番初めに經驗した戀は、一七九六年ラヘルが二十四歳の時にカール・フォン・フインケンスタインといふ人と婚約したそれである。カール・フォン・フインケンスタインといふ人は、年が十八九の若い青年であつたが、ラヘルは父を喪つて始めて自分の感情生活が拘束されないものとなつて、一種の華やいだ若々しい血が自分の心臟を巡り初めたことを感じた。而して社會に顏を出せるやうになり始めて、人生の明るい方面を見ることが出來るやうになつた。其の時芝居でカール・フォン・フインケンスタインに逢つたのである。處が此の人は非常に美しい男であり、又總ての修養も立派に出來て居つて、何處から見ても拔け目が無く、話の筋も非常に面白く、能く人を惹つけるやうな話振りであつた。此の人に逢つてラヘルは今までじつとして居つた感情が始めて動き出した。而して本當に此の人を愛したと思つて、自分の心のたけを告げて遂に婚約を結ぶに至つた。けれどもラヘルは猶太人のことであるし、財產も社會的位地もさう高いものではなかつた。之に反してカール・フォン・フインケンスタインは非常な金持で、社會的位地も高く、美しい容貌の持主であつたから、母や姉妹は理想的細君を持たせようと思つて居る所へ、其處へやつて來たのがラヘルといふ位地も金もなく、而も伯爵よりも年の進んだ猶太人の娘であつた。母や姉妹は無論これに不服で色々低級の壓迫を加へた。ラヘルは初めての戀の經驗に熱中して居つて、身も心も打ちまけて居つたけれども、段々カール・フォン・フインケンスタインの態度が怪しくなつて來て、色々口實を設けてラヘルから自分の身を逃れようとした。ラヘルは其の人の如何にも輕薄なるを知つたけれども、實に困ることは戀であつて、其の男がそんな馬鹿らしい人であつたと知りながら、それを愛さないといふ譯には行かない。ラヘルは大變苦しんだけれども、遂にそれが成立たないで二人は離れなければならなくなつた。此の如くにして二十四の時から二十八の時まで五年に亘つた婚約が到頭破れて仕まつ

た。併し此の時の戀愛は言はゞ林檎の木に花が咲いたやうなものであつて、まだ實が結ばれるには程が遠いのであつたから、ラヘルの心にあつた力は其處から纔かに回復されて、苦しんだことは非常に苦しんだが、再び新しい力を働かせることが出來た。而して或友人に連れられて巴里の方から白耳義に行き、和蘭の方に廻つて暫く胸中の悶々を忘れて居た。巴里に居つた時に、或若い人と友情が出來たけれども、それは戀にならないで、親しい兄弟のやうな友情を續けて居つた。而して伯林に歸つて來たが、其の時西班牙の公使館附であつたドーン・ラファエル・ダルキーオといふ人と懇意になつた。これはラヘルが三十歳の時である。女の三十歳は第二の女性の危機に際する頃で、心の動き方に依つてもう實を結ばねばならぬ時期である。實を結ぶかどうかといふことは、女性に取つては致命的の重大のことである。此の時に起つて來る戀愛は、殆んど全身を投じて猶ほ足りない程の深いものでなければならぬ。其處へドーン・ラファエル・ダルキーオが現はれたのである。此の人は西班牙人に特有な非常に強い熱情の持主であつて、ラヘルも亦此の人に對して渾身の愛を捧げたのであつた。所が此のドーン・ラファエル・ダルキーオは、ラヘル程の才能も無くラヘル程の識見も無い人であつたので、常にラヘルに對して自分は下手になつて居るといふ心持を拭ひ去ることが出來なかつた。ラヘルは愛した男に對しては、子供のやうに純潔な濁りの無い愛を捧げたに拘はらず、此の男は常に自分が引け身になつて居る弱みからして、ラヘルに對して疑の目を有つて嫉妬するやうになつた。而して其の不思議な心と心との葛藤が嵩じた結果、此の男は病的の嫉妬から遂にラヘルを怒らせるに終つた。ラヘルは此の不幸から自分を救ひたさの爲めに、有らゆる犧牲を拂ひ有らゆる困難と闘つて自分の眞情を其の男に知らせようとした。ラヘルがドーン・ラファエル・ダルキーオに贈つた手紙の中の言葉に、「愛は最大の自信である、目、耳、感じ、心、其の總てが強く說伏せら

れるのだ、若し人が此の力に抵抗することが出來るやうなら、其の人は實際愛しては居ないのだ。自信を意識することの出來る嵩高なる存在物である所の人間のみが、本當の愛をすることが出來るといふのは、つまり愛が最大の自信である所の證據である。」さういふことを云つて居る。此の位の深い心持でラヘルはドーン・ラファエル・ダルキーオに對したにも拘はらず、此の戀も長き試錬の後に遂に破綻に歸し、ダルキーオからお前は決して私を愛するものでないといふ疑ひの宣言を受けて離れて仕まうことになつた。

ラヘルの最初の戀も致命的であつた、二度目の戀も此の如く傷を受けた。彼女はもう殆んど立つことも出來ないやうな境遇にあつたと謂はねばならぬ。併しラヘルの心の中には、もつと強い所の生命が動いて居つた。誰かゞ云つたやうに、まだ壊れたことの無いバイオリンは、非常に高い強い音を出すけれども一たび壊れて美しく修繕せられたバイオリンは、其の音こそ低いけれども、調子が更に美しいものになるといつたやうに、ラヘルの性格の中にも、大きな傷を受けた後には更に超絶した性格が動いて居つたものと見へる。其處へ一八一四年に第三番目の戀人なるバルンハーゲン・フォン・エンセといふ人が現はれたのである。此の人はラヘルより十六の年下であつた。而して此の人は聰明の生れつきを有つて居つた。又極めて批判力の強い人であつた。容易に物に動かない性質の人であつたけれどもラヘルのやうな獨創力を有つて居つた人ではなかつた。此の人はラヘルに逢つて暫く交つて居る内に、段々ラヘルの内部に動いて居る所の素晴らしい力に動かされたのである。彼はゲーテをも驚かしたやうな強い批判力を有つて居つた人であつたけれども、其の批判力で批判して見ても、ラヘルの心には到底自分の及びもつかない美しいものが藏されて居ることを發見して、而して遂にラヘルに對して深い愛情を持つやうになつた。ラヘルも二度まで非常に苦しんだ經驗があるから、容易に動かなかつたけれども、

段々バルンハーゲンの熱の加はるのに動かされて、再び此の正しい強い愛情に對して働き始めた。所が此の二人の間に又妙ないささつが起つて來た。それはラヘルが非常に立派な女であり、バルンハゲン其れ自身よりも遙に勝れた人格者であつたから、此の人と一緒に棲むことが出來まいと感じて、バルンハーゲンは常に煩悶した。ラヘルはそれに氣がついて、色々話し合つた末、二人の間に十分の理解が出來て愈々結婚することになつた。此の時のラヘルは四十二、バルンハーゲンは十六年下の二十六、斯くして十分に落附きのある深味のある道理に叶つた愛情が目醒めて來て、以後十九年の長い間、美しい結婚生活を續けて行つたのであります。此の結婚の成立つた時に、ラヘルは自分の夫と約束して、自分達はどんなことがあつても、二人の生活に於ては全く自由である自由を愛せよ。どんな生活に對しても決して自由を妨げまいと堅く約束した。併しながらバルンハーゲンの手紙を見ると、前にも述べたやうに愛情の日に新たなるを覺へ、年が經つ程二人の間の愛は酒の如く熱して行つて、二人の間は實に美しい關係が死に至るまで續けられたのです。さういふ風にして六十一の時にラヘルは死んだ。ラヘルはこれ程生命力に強く、六十近い五十幾つの頃にも、全く子供のやうに物を愛することが出來るといつたやうな狀態であつた。此の人の死に對する心持には諦めのいゝ人に見るやうな平安さはなかつたらう。然しながらラヘルは、ゲーテが持つてゐたやうな死生觀に安住することを得て大きなより高い存在にまでの個性の飛躍を實感しつゝ、靜かに死の來るのを待つたに相違ない。

お話は大變詰らなかつたけれども、結局そんなに間違つたことは申さなかつたと思ふ。ラヘルが新しい女として、十八世紀から十九世紀に掛けて斯ういふ考へを有つて居つたことは、私には一つの驚異であるので、御紹介をして見たのです。私はラヘルの生活は私達の生活に對する大きな暗示だと思ひます。二十

世紀の今日女性といはず男性の間にも、ラヘルの水準まで達して考へ且つ活きてゐる人が果してどれ程あるてせう。兎に角我々は外面に束縛せられた所の弱い考へに依らず、もつと本能的の力に忠實でありたいと思ふ。忠實であるといふことゝ單に外面的の動機に因つて動くといふことの間に、非常に差のあることは能く念頭に置いて頂きたいと思ふ。もう少し人間が内部の力から動くやうになつて來た時に、我々の社會生活の上に始めて眞實の力が動くのであつて、社會はもつと自由な、もつと力强い、もつと合理的な動き方をすることが出來るものと思ふ。私のラヘルに就いて知つて居ることと又感じて居ることは、大體此の位であります。

經濟問題の根本義

森本厚吉

一

我國で最も經濟的活動の盛んな此大阪の土地におきまして經濟問題の根本義と云ふ題で御話することは非常に愉快に感ずるのであります。

世界に唯一つの怪物――お化けがある、それは、「なまけもの」と云ふものであると云ふことをトーマス・カーライルが英國民に對して警戒を與へたのは約百年程前のことであります。

然るに大正の今日におきまして、私は矢張り同じやうに我國からどうしても此「なまけもの」と云ふお化を退治しなければならぬと云ふ處の使命を感じて居るものであります。

今日のやうに經濟的壓迫が非常に強い時に當りまして最も貴重な時間をぐづ〳〵して空費し、大正の御代の人間として十分に活動することの出來ない、或はこれをしない所の人は皆お化と云はなければならないのであります。

經濟問題の根本義はどこにあるかと申しますならば、要するに此お化を退治すると云ふことである。元來經濟問題と云ふものがどうして起るかと申しますならば、之は自然と人間との間に不調和があるから起つて來るのであります。若しも我々の生活に必要な處の食物其他の資料が昔のやうに十分にありましたならば、我々は何等生活問題に惱まされる事はない。即ち生活問題は無いのであります。

例へばこゝに時計がある。此時計が私に必要である。若しも日本全體、世界全體の人が矢張り私と同じやうに時計の必要を感じて居る所のものがありまして、其生産額が總べての人の慾望を滿足させる丈け、それだけ多くありましたならば何等時計と云ふ問題に關する經濟問題は起らないのであります。けれども實際においては自然と人間との間に矛盾があり不調和があります。我々はどん〳〵子供が殖へて子孫が多くなつて行くが、此自然の供給する所の生活に必要な物資には限りがあつて全人類を支へる事が出來ない。此不調和があるから經濟問題が起つて來るのであります。

二

經濟問題の起る理由は同種の欲望を有つて居る二人以上の人が同一つのものに對して欲求する處からして經濟問題が起つて來るのである。我國で米が經濟問題の中心になつて居る。何故であるかと申しますならば、我々國民全體が必要とするだけの米がないからであります。

元來生産と云ふ事實は二つのものによつて成立つて居る。第一は自然であります、第二は人間である。自然と人間とが協力して――言葉を換へて申します

ならば、人間が自然を利用して生産を行ふのであります、ところで自然と云ふものは元來は自由なものでなければならぬのであります、昔はさうであつたのであります。水と云ひ空氣と云ひ或は土地と云ひ凡て自然の要素は、我々が自由に使用し得たのであります。

けれども今日の資本主義の經濟制度においては著しい欠陥がありますから今日の社會制度におきましては、自然を自由に使用することが出來ない。私は北海道の山の奥からして此大阪に參りましても、自由に此自然を樂しむことが出來ます。奇麗な此附近の景色を見て樂んだつてまた私が大阪の空氣をいくら大きな口をして腹の中に詰め込んだつて、只であります。自然は自由であります。水も普通には自由に呑めます、けれども生産の根本となつて居る最も大切な土地には所有權と云ふものがあつて、我々のやうな貧乏人は之を自由に使用し得られない。うつかり人の地面に立ち入ると何とか權の侵害だと云つて警察に引張られて仕舞はないとも限りません。

自然は元來自由であるべきものであるけれども、今日では自然の根本である所の土地は私有權で制限されて居る。然も其土地を所有して居る人は極少部分である。さう云ふ少數者が土地を專有して居るからして國民の大多數はコヽに生産上において非常に自由を束縛されなければならぬのであります。私は今晩此土地の私有權、私有財産制度と云ふやうなものが善いか惡いかと云ふことは論じません、唯現在の事實はさう云ふやうな狀態であるが故に當然の結果として經濟問題が起らざるを得ないと云ふのであります。土地には限りがある、限りあるが上に僅かの人が所有して居る、卽ち一つのものを二人以上欲求するが故に慾望の衝突を來して經濟問題が起つて來るのであります。

三

一方人間について考へて見ましても我々は生産に向つてどう云ふ具合に働く

かと申しまするならば先づ第一に勞力を提供して活動します、勞働をして生産を爲すのである。過去の勞働の結果に依つて出來た處の資本と勞働とが土地に作用しまして、茲に生産が出來るのであります。社會の幼稚な時代には勞力の力も資本の力も餘り相違はなかつたけれども、謂所今日の資本主義の時代におきましては勞力の力は弱くして資本の力は非常に強いのであります。茲に於てか經濟問題が起らざるを得ないのであります。

然も資本家と云ふものは餘り勞せずして澤山の收得を得て居るのであります。私が假りに百萬圓の資本を有つて居るものとして、それを銀行に預けて置けば十萬圓内外の金は默つておつても入つて來る。不思議なものである。けれども無産者は朝から晩迄活動して――手足を動かし或は頭を働かして居るが、此勞力を提供するものは一日一生懸命に働いても幾らにもなりはしないのである。

私は曾つて上海に行つて其處に働いて居る多數の人力車夫を見たが、この位世の中に働く人間はなからうと思ふ程、烈しい勞働をして居る。そしてそれ等の人力車夫は實によく走ります、幾ら大阪の人力車が早いと云つた處で到底及ぶところでは無い。一寸餘談でありますがどうしてそんなに早いかと云へば彼處で昔俥に乘る外人が言葉の判らぬ車夫を俥上から頻りと足で蹴つたもので、蹴られるから仕方なしに走つたものである。それで今日でも非常に早い。上海に行つて車に乘ると何にも言はぬ中にどつとと走る、何處へ行くのか判りもしないのに駈け出す、先づあれ程働くものはありますまい、そんなにして朝から晩迄働いて居るが、それで幾らとるかと云へば自分の懷中へ入るものが一日僅か三十錢か四十錢で眞に氣の毒なものであります。

四

我々は小さい時分に小學校の先生から教はつたことがある、小學校ばかりて

はない、中學校の先生でも云つて居た。多分今でも聞かされて居ることだらうと思ふが、それは「稼ぐに追付く貧乏なし」と云ふことで、一生懸命に働きさへすれば貧乏は來るものではないと云ふことを能く聞されたものであります。私もそんなものかな、それでは大きくなつたら一生懸命に働かうと思つた。處がどうです、若しも稼ぐに追ひ付く貧乏がなかつたならば、上海の車夫や又苦力のやうなものは、みんな金持でなければならない筈である。然るに朝から晩迄一生懸命に働いた處が三十錢か四十錢しか儲からぬ、朝から晩迄働いても貧乏するのが現在の狀態だから、稼ぐに追付く貧乏なしなどゝは眞赤な嘘であつたとも思はれる。

之は單に下級勞働者ばかりではありません。恐らくは失禮乍ら此處に居られる諸君も多分さうであらうと思はれます。中には毎日金ばかり扱つて居る人がある。即ち銀行員なんか如何にも富者風を吹して居られるが隨分氣の毒なものが多いと思はれる。毎日算へ立てる百圓札は山程あるかも知れないが、夫れは重役であるとか社長であるとか或は一般資本家と云ふ極少數の人が處分權を有して居るので、使用人たる銀行員は朝から晩迄それを勘定して暮して居るに過ぎない。然り一から九迄の字を横に並べたり縱に並べたりして暮して居るに過ぎぬ。それも自分の金を勘定して居るのならまだしもであるが、みな他人の金だ。何にもならない、けれどもその人達は一生懸命にやつて居る。帳面に一から九迄の數字を並べたり算盤をパチ〳〵やつたりして居るが、そんな人は幾何位の收入を得て居るか？大阪のやうな處は知りませんけれども精々一ヶ月二百圓か三百圓位である。それも昔ならば大したものであつたでせうが、私の研究によれば一家五人の家族があつて能率の高い活動の出來る生活を送るならば、今ではどんなことがあつても三百圓位は要ります。三百圓と云へばその中の高級の人の得て居る月收入である。これでは稼ぐに追ひ付く貧乏なしと云へない。こ

れは何故であるかと云へば、卽ち今日の經濟界が病氣にかゝつて居るからであります。之は非常に治療を要することである、どうしたら此病氣にかゝつて居る處の經濟界を治療することが出來るか、目前に迫つた我々の重大な事件であります。

五

此治療をうまくやらなかつたならば我國の將來は危ないと思ふのであります。中にはかう云ふ人がある。「ナァニ經濟問題なんかどうてもよい、宗敎さへ信じて居つたら不足なんかは出ない、人はパンのみにて生きるものてない」とこれは實に尤もなことてす、本當なことゝ思ふ。然しこれは病氣にかゝつて居ない經濟界においてならば眞理てあるが、今日のやうな經濟狀態では大に考へを異にする必要がある。

私は幼少の頃父から武士道の敎訓を受けて士の子は腹が減つても餓じくないとか、武士は食はねど高揚子だとか云ふことを敎へられた。勿論大に味ふべき眞理が含まれて居るが隨分不合理な敎へてある。人間だつたら腹が減れば餓じいのは當然てあります。かの愛蘭のコークの市長も斷食して死んて仕舞つたんてすが、食はなかつたら死んて仕舞ふのは止を得ない事てあります。幾ら宗敎家ても武士の子ても腹が減れば餓じいのは當然てある。高尙な理想界に適用すべき眞理を此病氣に罹つて居る社會に其儘適用しようとするものだから非常な誤が起つたのてあります。

私は申すまてもなく宗敎や文藝を尊重致しますが、今日我日本の經濟狀態を見るとどうも文藝問題宗敎問題も必要には必要てあるけれども、それと同樣にそれ以上モット必要なことがある。それは經濟的に國民を救濟するといふことてあります。

我々は先づ目前の衣食住を主として居る生活を安定にしようと云ふ處の問題

を研究しなければならぬ。經濟學者の尊敬して居りますマルサスは御承知の如く人口論を著述いたしましたが、アノ人の父親は宗教家であつて牧師であつた。それで父マルサスも精神的に人間を救ふことが出來るやうにしやうと思つて、神學を研究させた。彼は最初から非常に眞面目な人であつたから宗教上のことを一生懸命に研究して、どうしたならば英國人を幸福にすることが出來るかと研究した。ところが研究が進めば進む程物質的のことが大切であることが分かつて、到頭經濟學者となつた。そして先づ英國人に對して十分食糧を與へよ、英國人を救ふには先づ食物を與へなければ到底駄目だと氣がつきました。そして唯物論者の經濟學者になつて仕舞つたのであります。

我々の目前に横つて居る問題は經濟的に我國を救はなければならぬと云ふことである。此意味におきまして、此病氣にかゝつて居る經濟界をどうしたならば救濟することが出來るか、我々が靈のパンを求めなければならぬのは動かすべからざる眞理であるけれども、それと同時に肉のパンを我々は先づ求めなければならぬ。それで生産の要素である資本と勞力との關係を考へて見ますとこゝに非常な矛盾があります。卽ち勞力によつて作り上げたものを資本家は餘り勞せずして澤山の利益を得て居る。一方肉體を動かして居る勞働者はいくら一生懸命になつたつて、追付かない。其報酬たるや非常に少ない、そこには何處かに非常な欠陷が見出されなければならないのであります。

或人は資本主義が絶對的にいけないと云つて之を根本的に革新せんとして居る。今日八ケましいボルセヴキズムも此問題を解決せんとしたものであるが、あんな狀態に陷つたのであります。私はこゝにこんな問題についての批判を試みやうとするものではない。そんな事實がよいか惡いかは別として、今日の經濟界には矛盾があつて病氣に罹つて居ると云ふことだけは豫め十分理解して貰ひたい。我々は此矛盾を解決しやうと云ふ時に當りまして先づ其原因から研究

を進めなければならぬ。卽ち今迄の經濟學說は根本的に誤謬を有つて居つたのであります。

六

其誤謬は何であるか、一言にして云へば今迄の經濟學は其目的を手段として手段を目的として居つた事であります。尙詳しく申しますならば國民は經濟學と云へば富を作る學問であると思つた。卽ち生產と云ふものが主となつて居つた。それが爲には人生は犧牲にしてもよいと思つて居つた。何でも人間はどんな苦痛を忍んでもよいからして國家の爲に生產に從事せねばならぬ。國家の隆盛を期するには個人はどうでもよい。國內に出來るだけ澤山に金を作る事が最も大切な事で個人と云ふものは閑却され、國家のために個人の利益を顧みなかつたのである、これが抑もの誤りであります。

我々はお互に人間であります。此世の中に個性程大切なものはない。勿論國家と云ふものは大切でありますから、出來るだけ强力な國家を持ちたいけれども、强力な國家を持つ爲めには國家を作つて居る處の國民の個性を十分に開發しなければならぬ。我々個人個人を出來る丈け强くすることに依りて初て國家は本當に力强くなるのであります。

斯の如くにして個人主義が次第に國家主義以上の勢力を有する樣に時勢は變化した。漸く今日に至りまして勞働は商品でないと云ふことが華盛頓の國際勞働會議に於ても決定されるやうになりましたが、昔は勞力を自由競爭の烈しい此社會に提供すれば、全く普通の商品と同じ具合に需要供給の法則で躍下げられるから、賃銀の安いのは當然である。唯露命を續けるに必要な額だけの賃銀を與へればよいのだと云ふ主義が信ぜられて居りました。けれども今日の經濟學は違つて參りまして、賃銀をそんな冷酷な鐵の樣な法則で決定すべきものでは無いと云ふ事を主張し始めまして、今では經濟學は人間を高價にして富を安

くするのが經濟學であると云ふことをセイリグマン博士等は頻りに說いて居ります。然り經濟學と云ふものは人間が主でありますから、人の生活を第一に開發しなければならぬと云ふ、即ち人が中心となつて生產は人の生活の爲にする手段に過ぎない。

勿論古い頭を有つて居る人は斯うは考へないで、出來るだけ會社の利益を多くし株主の配當金を大にするために個人はどうでもよいと云ふ主義でウンと勞力を絞り取つたものである。然しながらこの生產業と云ふものは人類の幸福の爲めに起つて居るのであるから、先づ生產を多くすると云ふことを考へるよりも人間そのものゝ幸福增進について考へなければならぬ。人間を高價にしない生產は是認する事が出來ぬ。實に人間を高くして富を安くすると云ふところが今日我々の當然主張すべき主義であります。若しも此觀念を有つて經濟問題を解決するならば事は容易いと思ひます。

言葉を換へて申しますならば生產が主ではない。消費が主である。我々の生活が主である。生產は生活の爲に生ずるのであつて經濟學で普通に生產、交換、分配、消費と四つの部門に分つて居りますが、今迄は消費のことは殆んど云つてゐない。そんな事は論じなくたつてよい。そんなことはうつちやつて置けと云はんばかりの考へでありました。

そして第一は生產、第二は交換、第三は漸く十九世紀頃から分配と云ふことが重要視されるやうになつて來た。然し乍ら這次の戰爭の爲に時勢がコロりと引つくり返つて來まして一番大切なものは消費であると云ふことに注目さるゝ樣になつて來た。人間そのものゝ能率が高くなければ駄目だ、働く爲には人間らしい生活をしなければならぬと云ふ考へからこゝに消費と云ふことが經濟學の主要問題の一となつて、實際問題としても生活の安定を得ると云ふことが第一の目的であるべきことが認めらるゝのである。之を徹底的に色々の方面に解說

を行ひましたならば總べて經濟問題は段々と時代精神に適合した滿足な解決を得らるゝものと信ずるのであります。

七

斯の如くして經濟學の目的は人間を高くして富を安くすることであるが、今日の事實はどうであるかと云ふに人間は未だ非常に安いものである。今度の歐洲の戰爭では直接間接に約七千億萬圓程の金がかゝつて居る。此戰費をどうして勘定したかと云ふことは學問上興味ある問題になつて居るが、佛國學者バリオーが死んだ人間の價値は幾何であるかと云ふことを調べたものを近頃讀んで私は情ない事を見つけた。此の研究によりますと、人間一人前の代價として米國人が九千四百四十圓、英國人が八千二百八十圓、獨逸人が六千七百六十圓、佛國人が五千八百圓と評價して居る。日本人はどれ位だらうと思つて見るけれども書いてない。よく見ると隅つこの方に日本人は先づ露西亞人と同じく評價すればよいだらうとある。露西亞人はそれでは幾らかと云へば四千四十圓の最下級であります。そして其四千四十圓と云ふのもおまけして露西亞人と同値にしてやれと云ふ手心の加つた償である。情ないぢやありませんか、米國人や英國人は皆我々の倍以上の値段がついて居るのであります。各國は八千圓以上の値段がついて居るが日本人はおまけして四千四十圓とは情ないぢやありませんか。どうです、世界の國際的商店におきまして我々人間が賣買されてお互のやうに黃色い顏をして居る人間は四千四十圓、白色の外國人は八千圓で、黃ろいのは白いのゝ半値だと云つたら情ないぢやありませんか、今日排日問題が八ヶましいのは結局此邊から起つて居るかと思ひます。この評價がどうして半値につけたかと云ふことを調べて見ると詰り我々の生產能力が弱い。我々の生產能力が英國民や米國人の半分だと云ふことであります。其說明を聞いて見ると一度は怒つて居つた處の我々も成る程さうかと思はなければならぬ。我々の働き

は歐米人の半分だと云ふのてある。

八

私の知つて居る米國人て銀行の頭取がありますが、その人を曾て訪問した時に先づ案内を乞ふと其處の給仕人が案内をして云ふには頭取は今お客さんがあつて忙がしいから、もう十五分過ぎると面會が出來るがお待ち下さればよし、もしお待ち願へなかつたら面會日にお宅へ行つたらよいてせうと云ふのて、日本ては十五分や二十分は平氣だから待つて居ました。そして時計を見て待つておるときつちり十五分になると唯今頭取が面會になりますと知らせて來た。なる程十五分だつた。懸引のない十五分、さうすると小さい應接間に行つて見ると時計があり、綺麗な花の畫の額があるし、その中に椅子に頭取が据つて居て、何の御用かと聞くが、私はそれに關はらず色々な世間話をして居ると向ふはしかめつ面をして居る。此方はお構ひなしに御話するが一向話に油がのらない。唯ノーとかイエスとか云ふ位てある。何だか可笑しいなと思つて居ると、ふと、コトンと云ふ音がした。それてその音がした方を見ると驚いたことには綺麗な花の額があつたと思つたのにそれが忽ちの中にタイム、イズ、マネーと云ふ額と早變りして居る。ハ、ア何か仕掛がしてあるな、タイム、イズ、マネーと云ふ字を出したんだからこれは用事を早く云へと云ふことだらうと思つて、實は之々の用事てあると切り出したら彼は始めてニコ〳〵して云ふには、早くそれを聞き度かつた、今は執務時間てある。この銀行は無數の株主の金が集まつて出來たものて今日多くの客を相手に仕事をして居る私は大なる責任を有つて居るから、この執務時間は一分ても空費してはならないのてある。世間並の話は私の家て聞きたい。こゝては事務に關係したことを聞きたかつたのてす。

ハ、アそんな譯てしたかと餘計な無駄話をして居つたことを後悔して、さうてすか、よく判りました。大變惡るかつた。それにしてもあの額は初め花があ

つてそれが話して居る中にコトンと音がしたかと思ふたらもう早變りして居たが、一體どんな仕掛がしてあるかと云つたら彼はニコ〳〵して打融けまして、斯う云ふ仕掛だと云ふのてその足の下を見ると呼鈴を押すやうに電氣の釦がある。そこに電流が通ずるとその額が落ちる仕掛になつて居る。まあやつて御覽なさいと云ふのて押して見ると、すぐタイム、イズ、マネーと書いた額が引くりかへつてコロット花の額が出て來た。

勿論此人は餘程風變りの人て誰れでもさうだとは云ひませんけれども、兎に角米國の實業家は時間を非常に尊重して能率の高い生活をして居るのてあります。恐らくは、それだけの努力を日本人がやりましたならば我々の生產能力は確かに二倍以上にすることが出來て、一人の價四千四十圓と云ふものが英米人と同樣に八千圓九十圓のものになるだらうと思ひます。

九

今の日本人の生活には非常な空費がある。如何にして我國民生活に無駄が多いかと申しますに、夫れは我國民が劣つて居るのては無く個性の開發又は人の生活と云ふ樣な根本のものには注意を拂はなかつたからてあります。本末を混同して、手段てある處の生產ばかりに全力を盡して人生を輕視して居つたのが不可なのてあります。經濟學の根本義は我々國民の生活能力を增進すると云ふことてあります。能力の增進これが今日の經濟問題の根本義てあります。幾ら取引所の問題をうまく解決して見ましても、幾ら賣買の制度を改良した處が、若しもお互經濟が活動自分の能率を高めると云ふことをしなかつたならば、制度も改良も丸て役に立たない。我々は先づ第一の問題と致しまして、國民の能率を高めることが必要てあります。此根本義に觸れなければ我國が經濟的に外國と競爭することは出來ないのは當然の事てある。

私は幸ひ今晩確信を以て云ふことが出來るものがあります。今日日本は經濟

的に弱い其能率は低いけれども若し國民が覺醒して我々の生活を改善し、今迄よりも合理的の生活を營むやうにしますならば、我々の能率は二倍三倍に高まり一人て二人前、三人前の仕事が出來ると云ふ確信を有つて居ります。此確信が無かつたならば文化生活なんかと云ふ運動は興さない。もしも今日の社會に注意を拂つて我々の生活を改善し、文化的の生活を送るやうにしたならば此行き詰まつた文化を自然的に延ばすことが出來ると思つて居ります。

十

時代は非常に變つた。此戰爭の爲に時代は一變したけれども不思議にも國民生活はちつとも變つて居ない。之れを食物について見ても我々のお祖父さんやお祖母さんの食して居つたのと變りはない。相變らずお香物でお茶漬の粗食て滿足して居る。だから十分な活動には適しない。衣物も其通りて相變らず不合理極まるものを着て居る。如何に慾目に見ても現代の活動には適しない。要するに物質生活においては封建時代と餘り大した變りはない。尙ほ家屋の改造も圖らねばならぬ。今日の吾々は西洋間も日本間もなければならぬ。洋服も着れば日本服も着ねばならぬ。種々の點に於て二重生活をやつて居る。

今日のやうに生活が脅かされて經濟的の壓迫が強く、爲に國民の大部分は食ふことさへ出來ないやうな憐れな時代におきまして、二重生活を營むが如き餘裕はある筈が無い。假令自分自身にかゝる生活は便利てあるとしても、若し我々が二重生活に浪費して居る所の勞力と金をもつと有益な事に費しましたならば、どれだけ日本の文化の爲に益するか判らぬ。要するに我々は生活改造を科學的にやらなければならぬ。今日食品化學は非常に進歩したが、人間はどんなものを食つたらよいか。平均十四貫目の體重の人が朝から晩迄働いて細胞の消耗はどれだけてあつて、夫を補ふにはどれだけの榮養素をとらねばならぬか、小供が成長するにはどれだけの成長素が要るか。之等の科學的問題は未だ普通

の家庭で取扱つて居ない。

今日婦人の方も澤山見えて居りますが此新進の大都會において臺所に食品の分析表や價格表等を用ひて毎日の献立を作り、どれだけの食物を食すれば一日に必要な蛋白質二十五匁、脂肪五匁と云ふ具合に養分をとることが出來るかを考慮して居る人が幾人ありますか。恐らくは兩手で算へられるか算へられない位でありませう。大阪の如きに於て既に然り。我國において生活と云ふことは家庭では餘り考へられて居ないが、さう云ふことは整然と化學方面、衛生學の方面においては研究されて居る。唯だ我々は之を實生活に適用しない迄の話である。即ち出來ることであるがそれをしないのである。お互は新時代に適する處の食物を食し、着物を着、家を持ち、さうして新時代に適合する所の社交を行ふ事が出來ましたならば我々の能率を二倍三倍にすることは容易に出來る。これは決して机上の空論ではない。學理で以て示すことが出來る。現に實行して居る人もあるのである。これで今日の最大問題は、どうしても今日新時代の敎へて居る處の色々の眞理を我々の日常生活に適用すると云ふことであります。衣食住の表面的改善丈でなく精神的内發性を實生活に充實せしめることが又更に一層必要であります。

十一

斯の如くして初めて我々の生活の能率を高める事が出來るのであります。されば生活の改善と云ふのは唯今申したやうに今日知つて居る處の科學の知識を生活に適用すると云ふことであります。これはどう云ふことであるか、言葉を換へて申しますならば我々の生活に經濟主義を適用すると云ふ事に期するのです。然らば經濟主義とは何であるか。曰く、最小の勞力を以て最大の効果を得ると云ふのであります。その様な利己主義はいけないと云ふ人もありませうが此經濟主義を生活に適用するのでなければ、改造は出來るものでない。經濟問

題の今日起つて居るのは前述の通り自然と人間の間に矛盾があつたからである。此矛盾を解くには此最小の能力で最大の効果を得るやうにやるより外に途はないのであります。詰り我々はなまけてはならない。出來るだけ時間を利用して出來るだけ、より良き生産を擧げると云ふことであります。經濟主義を我々が適用する事に依りて、もう少し能率の高いものにしなければならんのでありますが、今日普通に能率を高めるにはどう云ふ方法が行はれて居るかと云へば茲に二つある。一つは外的の手段で一つは内的の手段であります。外的の手段はテーラー其他の人達が研究して居る。氏の研究の結果に依ると、もう少し勞働の組織を良くしたならば人間が今迄通りの時間だけ働いて二倍以上の効果を擧げ得ることを證明した。或日テーラーは貨車から鐵の塊を運び出す職工の一人に云ふには、お前は今と同じ時間働いて二倍以上の賃銀を欲しくないかと云ひますと、それは欲しいんですが隨分勞働が烈しいでせうと云ふから、いや勞力は激しくないが、唯だ一つの條件がある。それは私の命ずる通りに働かなければならんぞと云ふと、職工は、よろしうございますと云ふ。夫れて、其翌日の事テーラーは時計を手にしながらスペート・シャベルを握れ、それを掬へ休めッラ持てと云ふ具合に命令通りにやると、知らぬ中にどん〳〵能率が擧つて確かに一日に二倍以上のものが運ばれて居る。そして倍以上の賃銀を貰つた。紐育てメトロポリタンと云ふ生命保險會社がありますが、そこには能率課と云ふ課がありまして能率の試驗をやつて居るのでありますが、私は課長に會ひまして、今何を試驗して居るかと聞くと、椅子の試驗をやつて居ると云ひます。色々の椅子を作つて居る、半吋高いのもあれば低いのもある。即ちどんな椅子に腰掛けたが一番仕事が餘計出來るかを試驗して居るが、之がもしうまく行つたならば此會社だけでも何百萬弗と云ふ利益がある。そして此椅子の能率檢査はどうしても五年かゝる、との事でした。驚くではありませんか。日本て

椅子の檢査をやつて居るところが何處にあるか日本では椅子屋から買つて來た切りて腰掛けて居る。そしてどうも椅子は掛悪いと云つて居る。當然です。日本で作つて居るのは西洋人の作つて居る椅子をその儘に作つて居る。我々は西洋人より腰から下が低い、その西洋人の椅子をその儘に用ゐてどうも椅子は苦しいものだとは馬鹿者の云ふ事てす。私は始終方々て講演しますが、私の講演の時間の長短を決定する一要素としては室や椅子の構成の如何てあります。非文化的の室や椅子てあるなら話す方ても草臥れ儲けの事てあるから話は短くして切り上げる。室もよく椅子てもよい椅子だと思ふと時には二時間も三時間も話す。實は今晩は斯う云ふ立派な建物でありますから實は二三時間も話したいけれども後の講演者もありますから長くは申しません。

十二

それて以上云つたやうな外部の事柄にも注意を拂はねばならぬが、それ以上に大切なものは内的の能率增進てあります。内的の能率增進法を私の時間として殘つて居る十五分て話します。我々が内的の能率を增進しやうと云ふには、どうしたならばよいか、それは何てもない、我々の働きを遊戯にして仕舞ふと云ふ事てあります。其秘訣の法は何てあるかと云へば我々は勞働と云つて居るものと遊戯と云つてるものとの區別さへ明かになればよいのてあります。

勞働は苦しいものて遊戯は樂しいものてありますが、何故てありますか。こゝに一つの例を上げて見ませう。例へば諸君はテニスをやられるでせう又はダンシング——今日のハイカラの人はダンスをやる。文化生活と云へば何てもハイカラな事をやる樣に考へる人もあるが、夫は大した誤てある。我々は所謂ハイカラな事は大嫌ひて、奢侈と云ふものは絶對的に攻擊して居ります——ダンシングと云ふものはあれは勞働てありませうか、遊戯てありませうか——經濟學の講義てもするやうてありますが、アフリカのホツテンテツト邊りに住つて

居る野蠻人は月のよい夜など足に鳴物をつけまして、そして身體に繪の具をつけて足を動かして踊り初めるとそれが疲れ切つて鼻血を出して地に倒れる迄踊るのであります。これも遊戯であります。又こゝにピアノがある。ピアノもお嬢さんが月を見て彈ずる。これは遊戯であります。然しピアノの先生が弟子をとつて朝から晩迄やつて居るのと、ピアノを彈ずると云ふことは同じことに違ひないが之は勞力であります。それでは何處が違ふか、私がマラソン競爭をやると云つて京都迄走つたとするこれは遊戯であります。それを人に賴んで京都迄行けと云へば十圓も十五圓も出さなければ行かない。行くと云ふことには同じ事ではあるけれども、一つは遊戯であつて、一つは勞働である。どうしてそれが違ふか、このホウテントット邊りの野蠻人のやうに踊りぬいて鼻血迄出して倒れると云ふ事は其活動行爲において勞働との區別はない。

それでは何處に區別があるかと云ふと、目的のある所が違ふ。遊戯は其目的が活動の內にあるが、勞働は其目的が活動の外にある。ピアノの先生が敎へる爲に彈いて居るのは彈くのが目的ではなく、一つの手段であつて月謝其他の報酬が目的であるのが普通である。けれども音樂家が月を見てベート！ベンのムーンライト・ソナタでも彈いて居るのは其彈く事が目的であるから、樂しい所の遊戯そして若し樂しくなくなつたならば直に中止するから遊戯には勞痛を生ずる餘地が無い。卽ち目的が行爲の外にあると苦しくなり、目的が內にあると樂しいものとなるのであります。こゝに凡て成功の秘訣があるのです。

私達が銀行員にでもなつて朝から晩迄一から九迄の字を横に並べたり縱に並べたりして居るのも、若し其行爲其者を目的としてそこに目的を置けば遊戯となり得るのでありますが、若しも朝から晩迄働いて居なければ月末に月給が貰へない。その月給の百圓か百五十圓を目的として働いて居る時には苦しい勞働に成るのであります。

十三

私共は世の中に產れて來た以上何か仕事をしなければならぬ。其の働は如何なるものでも、其度に天職があると考へて忠實に活動をするならば、その中に面白味を感じ得る樣に精神的修養が出來るものである事を偉人の傳記が示して居る。即ち目的を內に置いてやつて行けば遊戯に化するのである。

私達が喋舌るにしても何か外に目的を有つてゐたならば迚も講演なんかに出あるく事は出來るものではない。然し國民の生活を改造して能率の高い文化生活を送らするので無ければ此文化を如何にすべきか、このこと程大切なことは無いと信じて其處に目的を置きましたならば何等苦しいことはない。この喋舌つて居ることについて私は今何等の苦痛をも感じない。もし諸君さへ我慢されたならば夜の明ける迄喋舌つてもよろしい。苦しいのも樂しいのも凡て心の持方で定るのです。

それで我國民全體がこの心持を有ちまして——目的を行爲に集中する事につとめ、報酬に目的を置かず、職業其物に目的を置く方法を講ずることが出來たならば我々の能率は確かに二倍三倍上つて來る。我々が厭々ながらに仕事をして居る間は到底我々の能率は上がらないのであります。

それで仕事を遊戯化することが出來たならば喜んで仕事に當るやうになつて自然と顏がニコついて來ると思ひます。

一體考へまするのに日本人程しがめつたらしい顏をした人種はないのであります。

上海は色々各國人がより集つた處であるが、その上海で私が調査した處によると、歩行して居る日本人は十人の內九人迄は、しかめつたらしい顏をして居る。之に反して歐米人を見ると半分以上はニコ〳〵して歩いて居る。

これはどうしてゞあるかと云へば詰り日本人は毎日の生活が不自然で、生活

が一種の勞働で未だ遊戯化されて居ないが爲であらう。それで自然しかめつらになるのである。殊に女のしかめつらなどは男より見惡いものです。女がしかめつらして居ると其家庭は冷やかになつて來る、勢ひ夫は家庭が面白くないから、待合通ひや藝者買をすると斯う云ふことになるのが多い。

日本の内地は勿論何處の日本殖民地へ行つても藝妓や娼妓が澤山跋扈して居るのを見るが、こんな現象は恐らく日本だけであらうと思ひます。殖民をするのに待合を作り娼妓を置かなければ殖民が出來ないとは何たる事であるか、これと云ふのも家庭に樂しみが薄いと云ふことにも一部の原因はあると思ふ。家庭の生活――豚のやうな生活をして、それでしかめ顔の競爭を見せられては堪つたものでは無い。

これと云ふのも全く目的を外に置いて居るからいけないので、行爲が目的の内にありますれば自然と滋面が笑顔になつて此世の中は美しくなつて來る。そこで初めて我々の主張して居るやうな樂しい而も能率の高い文化生活を送ることが出來るのであります。そしてこの社會が今よりも遙かにのび〳〵した立派なものとなつて來て、健全なる經濟的發達を來し得るに至るのであります。斯く考へますと經濟問題の根本義は私共個人〳〵の生活能力を根本的に增進させる事であります。故にどうかして諸君と共に新時代に生きて能率の多い文化生活を送りたいものであります。是れ以上の根本問題は他にありますまい。

生活權の主張と其責任

森本厚吉

一

二三日前に東京の新聞で見ました記事の中に、こんな事が書いてありました。即ち此神戸の監獄の中に、殺人放火罪の犯人として十五年の刑に處せられて居る人があるさうであります。此人が今まで既に七ケ年の間、苦しい監獄生活をして居りましたところが此頃其の事件に關聯したところの一人の人が、死際に當つて遺言を殘した。それに依ると、此の殺人放火罪を犯した者は、今監獄に入れられて居る人ではなくして、此人であつたといふことです。此記事は多分皆さんも御承知だらうと思ひます。何の罪も無いところの、自由の民を誤つた裁判の下に七ケ年も監獄の中で苦役に從事させられたと云ふことは、實に由々

敷大事件であります。人間として有つて生れたところの、自由の權といふものが、所謂法律を楯に取つて蹂躙されて居ると云ふことである、恐ろしいことであります。

私は此記事を讀みまして熟々感じましたのは、斯う云ふやうな問題は、單に其監獄の中に居る島某と云ふ人許りでなくして、多數の人々が同樣に一種の重大な權利を無法にふみにじられて居りながら、之を自覺して居ない。即ち生れながらにして有して居る天與の權利が或力に依つて蹂躙されて居るのであると思ひます。實に恐ろしいことであります。

吾々が二十世紀の此世に生れて、富者も貧者も如何なる人でも、有つて居る筈の一種の權利が、十分に又自由に行司することが出來ないで、間違つたところの經濟、社會制度、間違つたところの法律、間違つたところの種々の事柄で以て、吾々の其權利が蹂躙されて居ると云ふ事實を、大正の聖代の今日日の前に見るのであります。

二

其權利は何であるか、即ち生活權と云ふ權利であります。生活權といふのは之は新しい言葉であります。未だ餘り日本では用ひられて居らぬ文字であります。勿論生存權といふ文字は早くから用ひられて居りますが、其生存權は時勢の進歩に伴ふて今日では生活權に發達して來たのであります。米國ではワシントン市に在るワシントン大學にライヤンと云ふ教授がありまして、生活權に關係して可成詳細な著述を出して居りますから、一部の人には此問題は問題になつて居るけれども、不幸にして日本に於ては、生存權を論ずる人々はありますけれども、未だそれ以上の文化的生活權を論ずる人が甚だ尠ない。從て自己の大切な生活權を自覺せず、漸く露命をつなぐに過ぎない生存狀態に甘じて居る國民が非常に多數に存在して居るのは眞に殘念に思ふのであります。之は

曩に申しましたところの、誤つた裁判を受けた不幸な人以上に重大事件であると思ふ。然かも研究の結果に依りますと、今日我國民で、百人の中で九十八人位迄は其生活權が蹂躙されて居るのでありますから非常に恐しく思ふのであります。

三

そこで私共が文化生活研究會を設立して、有島武郎君や吉野作造君のやうな方の助力に依つて文化運動を起さんとして居るのは何の爲めであるか、一言にして云へば私共が大いに生活權を主唱して、之を國民全部に認識せしめ、進んで各自が生活權享有に對する責任を十分に感じて貰ひたいが爲であります。國民の大多數が此生活權を自覺してそれを主張し、其責任に覺醒するのでなかつたならば、今日行詰つた我國の文化を開發して世界の進歩と歩調を合して行くことは出來ない。然るに今日國民の多數が未だ生活權を自覺しないで安閑として居るのは眞に悲しむべき事であります。

實を申せば私共は頗る多忙の身でありますから、餘程重大なことでなければ態々こんな遠い處まで講演には來ないのでありますが、今や默す可らざるの秋であります。偖て大なる使命を感じて立ちました私は、今此處に與へられて居る約五十分の時間で十分に此生活權の問題を諸君と共に考へて見たい。さうして若しも幸に私共の主張に對して共鳴して下さるお方があるならば、日本帝國の將來の爲を思ふて、御互に協力して斯う云ふ方面の運動を一つ起したいと思ふのであります。

けれ共甚だ殘念に思ふのは、私は經濟學即ち物質的富の學問を專門にして居るものでありますから、先程の有島君のやうな綺麗な美しい藝術の問題なんかには親む機會が甚だ少ないのであります。從つて私にはあんな美しい審美的な御話は出來ません。頗る現實的で無趣味な講演より出來ないのであります。然し

内密に申しますと有島君なんかは私よりももつと〳〵進歩した、多分破壞的で所謂危險な考を有つて居るのでありますが、藝術家と云ふものは、どんな思想でも美しい感じの良いものにする力を有して居るのでありますから眞に美しいのであります。先刻の講演でも私共が目をつむつて聞いて居ると、丸で伊太利の景色でも眺めて居るやうな感じが致します。

四

一部の論者はさう云ふ點から批判を加へまして私が主張する文化生活は卑近極るものであるといふ攻擊がありますが、夫れは私の眞意を解して居ない批評であります。私自身は是でも相當に文學を研究した時代もありまして今でも人類の生活は藝術化しなければならんものである位のことは能く承知して居るのであります。唯其樣な問題は夫々專門家に讓つて、私は主として今迄は經濟學の物的方面から文化生活を論じたまでのことであります。藝術が文化生活に大切であればこそ「國家無用の長物」と或る國會議員が評したと云ふ有島君を私共の文化生活研究會の顧問として種々運動を開始して居るのであります。

去りながら話は元にかへりますが、實際問題として伊太利の景色が幾ら綺麗であつても、私が先刻申しましたやうな、無罪でありながら七年間も監獄に入れられて居る、以上に人權が無視されて居る――即ち生活權を享有して居ない多數の國民が面の當り澤山に泣いて居ることを考へますと、何程綺麗な藝術を共に語りたいと思ひましても、先づ夫よりも眼前の大問題である經濟生活問題を取扱はなければならんのであります。私はさう云ふ運命を有つて生れて來たのだから仕方がありませぬ。私の云ふことは甚だ烈げしいやうにお聽きになる方もあるかも知れませんが、之れでも心の中は綺麗で溫順しい、只有島君の如に言ひ廻しが出來ないまでの事です。

今迄の學說に依りましても人間が世の中に生れて來ると必ず生存權を持つて

居る。此世の中て生きる權利を持つて居ると云ふことは明な問題てある。然し著しく變化した現代社會に於ては單に生存するのみてなく、生活しなければならぬのてあります。生活すると云ふ事は何でもないやうに思ひますけれども、其實仲々容易の業てありません。

或は皆さんが生きて居るものは凡て生活して居るて無いかと云はるゝ方がありませうが、玆に考へて頂きたいのは、生活と云ふことゝ、生存と云ふことは大に違ふ事てあります。之は後て段々説明致しますが、私は今日國民の大部分は生活して居るのて無く、僅に露命を繼ぎ生存して居るのてあるから、駄目てあると云ふのてあります。現時代に生を受けたものてあれば、時勢に適合して能力の多い有益て、樂しい、無駄のない、學術的の生活を營まなければならぬ。さう云ふ工合に今日ては生存から生活に移り代つて來たのてありますが故に、今日ては生存權にあらず、生活權といふものを論じなければならんのてあります。

五

其事に就て先づ考へなければならぬのは、人間の進化に顯はれて居る事實てあります。先刻司會者木村君が申された樣に、吾々人類は幾ら威張つて居つたところて、先祖は猿の先祖と同じてあります。いくら眞面目な顔をして居られましても少し注意して見ると矢張り猿のやうな點が澤山にあります。チエビンの發達史にも書いてある事てすが、人間の中にも隨分毛深い人がありますが、其人の腕と猿の腕とを二つならべて比べると毛の生えぐあいは殆んど同じてあります。之れ兩者の先祖が同じてある證據てある。さうして失禮な話てすが、尻の方へ手をやつて見ると、尾骨がチャンと立派に二つ三つ附て居つて高く突き出て居る事が判ります。幸ひ皮を被つて居るから人間樣て大きな顔をして居る事が出來るのてありますが、矢張私共の先祖は猿の先祖も同じ事を證明して居す。

るのであります。今一つの證據を擧げて見ますと、赤ン坊が生れてから數週間の間は赤ン坊の腕の格好から手の格好が猿と一寸も變りはない。そして面白いのは產れたばかりの赤ン坊でも其握力が非常に强い。其理由は猿の子供は產れると、其子供に取つて一番大切な事は、生存するが爲に常に母親に嚙り付いて居らなければならぬ事である。若し敵の攻擊に遇へばボーイと枝から枝に飛んで逃げる必要があります。而して其の時に確りと胸の毛を握つて居らなければならぬから自然握力の强い事が一番大切なのであります。それであるから人間も赤ン坊の中は猿と同じく握力が非常に强い。若し細い枝を握らせてブラ下げて見るならば大丈夫自分の身體を支へて落る事はないと、チエピンは書いて居ます。自分も子供が生れた時に實驗して見ましたが火箸の太いのを握つてブラ下がる容姿はチエピンの本にあるのに實に好く似て居つた。けれ共自分は進化論の專門家でない悲しさ充分の確信が無く、實は心配であつたから私の赤ン坊を持つて居つた手を離す事は致しませんでした。併し夫れは大丈夫だとチヤンと本に書てありますから諸君に子供が生れましたら下に澤山蒲團でも敷いて試して御覽になる事をすゝめます。勿論別にそんなことをしなくても顏を見れば分る。一歲未滿の赤ン坊を見ると猿と一寸も變らない。よく奧さん方が貴方の家の赤ン坊は可愛い赤ン坊ですなどゝお世辭をいふ人があるが、夫れは虛言です。赤ン坊が人間らしくなるのは、先づ一年位經た後の事です。夫れまでは人間より猿の方に近いのです。それが母親の愛で猿のやうな子供を育て上げて成長するに從つて漸く可愛くなつて來るのである。

六

それでは何故に同樣の先祖をもつて居つたか、人間が猿と違つて斯う云ふ工合に偉くなつたか、先程生物學上から木村君の話がありましたが、私は經濟學の立場から考へて最少し說明を加へなければならぬ。人間が猿と違つて居るのは

第一に人間は立つて歩くことを覺えた事であります。二本足で立つことを覺えると、如何にして猿より偉くなることが出來たかと云ふに、それは手が自由になるからである。手が自由になつて之が段々進化すると道具を使ふことを覺え、進んでは機械を用ふることをも覺えます。どんな偉い猿でも棒を手にした人には勝つ事は出來ません。

道具を人間が用ゐるやうになつたといふことが經濟的に人類を著しく進化さした根本であります。さうして自由に手で道具を使ふやうになつて、其道具が段々精巧なものになつて、今日では蒸氣や電氣等の原動力を用ふる頗る大規模の複雜になつたものが盛んに用ひられて居る。此大阪神戸邊に無數に在る黑煙を吐出して居る煙突は皆其下に大きな機械が用ひられて居る事を示して居るのであります。實に進歩した今日の經濟界は機械の賜で、機械を出來得るだけ多く使つて居るものは夫れだけ非常に發達して居るに反し、幼稚な機械しか用ひて居ないところは、經濟界も非常に幼稚である。

さう云ふ工合に機械を非常に多く用ふる樣になつて、人類社會は著しく進歩を致しましたが、今日其進歩は或意味から考へると種々の弊害も伴ひ來た事が漸く注意さるゝ樣になつた。今經濟界發達の事實を見るに極く最初には狩獵及漁撈時代があつて、それが放牧時代に進み、次に農業時代が來て、もう一歩進んで手工時代になり、さうして最近には、人間の勞力を原動力にしないで、電氣だとか、蒸氣だとかの動力を以て生產を行ふ產業時代が來た。而して產業時代の特色として終に資本主義、個人主義が謳歌される經濟界が成立つたのである。

今資本主義が善いか惡いかを論ずる時間がありませんが、現在の事實を研究して見ると、資本制度の社會には非常に不公平なことが澤山起つて來て居るのに驚かざるを得ないのであります。資本を澤山握つて居る者は勞せずして澤山

な収入を得られるが、資本を有せず、唯頭を用ひ、手足を用ふる者は一生懸命に働いても人間らしい生活を營むだけの費用さへ十分に取れないのであります。

七

之は非常に不公平で間違つて居ることである。私は一部論者の如く資本家其ものが絶對に惡いものて有るとは申しませんが、資本家が得るところの報酬は彼が勞働者に支拂ふところの報酬に比すると無法に多いと云ふ事を斷言せざるを得ません。

會社の株主と云ふ樣な所謂資本家は、甚しきに至つては十割以上の配當を受けて居る時でも實際會社の實務に從事し、精神又手足を動して居る下級社員、又は職工等は「生活賃銀」以下の所得を受くるに過ぎないてはありませんか。勿論近來は世界思潮の影響を受けて幾分良くはなりましたが、未だ〳〵此富の分配は、今日の資本制度の下に於ては資本家の勢力が餘りに强過ぎるのでありますから、之をどうしても直さなければならぬ。

ローントリイと云ふ人は英國の生活問題研究者のオーソリテーてありますが同氏はヨークと云ふ小さな町に於ける勞働者の家計に就て種々研究をして、どうしてヨーク市に澤山の貧乏な人が居るかといふことを調べました。彼は貧乏線と云ふ線を拵へて其貧乏線に副ふて人生がどう云ふ曲線を描いて居るかと云ふ事を示して居ります。夫に依ると貧乏な人間は普通の場合三つの時代に於て貧乏になつて、貧乏線以下に下るものであると書いて居ます。

即ち先づオギアと生れた時分には貧乏線より一寸上の方にある。非常に貧乏てあるならば結婚は出來ない。多少の餘裕があつて初めて妻帶して子供が生れる。だから普通に人の生れた頃は貧乏線に達して居ないのであります。併し引續いて子供の出來るのが常てあるから、第一子が十三四歳になつた頃は澤山の子供が出來て生計が困難になり貧乏線の下にくだるのてあります。何處ても同

じでありますが、貧乏人の子澤山と云つて貧乏人は子が多い。否子が多くて貧乏になるものが多いのです。總領が生れると直ぐ第二番目が生れる。第三番目が生れる。それが三つ四つ五つ六つと重なるのですからやりきれたものであります。貧乏になるのは當然の結果であります。

けれども二十歳前後になると段々又貧乏線の上になるのであります。どうしてかと云ふと、其頃になると子供が內職をする、母親も子供に手がかゝらなくなるから內職をすることが出來る。從つて十五歳前後から次第に收入が增加して少し樂になり、貧乏線の上に段々と上つて來る。景氣が好くなり獨立して生活が出來る樣になるから二十五歳頃になると結婚して別家する樣になる。殘された父母や弟妹共は俄に收入が減じて、生活に困難を生ずるのであります。斯して父なる勞働者は三十五歳前後の壯年時代に於て又貧乏線以下に入つて苦しむのであります。併し自分と同じ運命が子供に及びまして第一子が二十歳前後になると種々內職をして呉れる。さうすると子供の世話がやけなくなるから又貧乏線の上に上つて多少樂な生を營み得るのであるが、自分が六十歳頃になると子供が結婚して分家して居なくなつて仕舞ふ。斯の如く老年時代になつて漸く少しく樂になつたと思ふと子供は別居して家を去つて仕舞ふし、自分は年を老つて仕事が出來なくなるから三度目の貧乏に苦んで此世を去らねばならぬのである。

八

斯くの如くにして彼等の運命は、第一　大切なる少年時代に貧乏の苦しみを受け、第二　大いに活動しなければならぬ壯年時代に再び貧に泣き、第三　平安な老後を送るべき老年時代に三たび貧乏になつて終に死するのである。

さう云ふ曲（カーブ）と同じやうな人生の曲を受けて居る人は、我が國にも實に多いのである。眞に憐れなものではありませんか。ローントリーは英國民が何故斯る

結果になるかと云ふ事に就き其原因として列記して居るものゝ第一は收入が少ないと云ふことゝ、第二は家族の人數が餘り多過ぎることであると云つて居ります。斯の如き原因に依つて斯の如き人生の曲線を描かねばならぬ樣に運命づけられて居るのであるから、私共が生活權を論ぜなければならぬ時代となつたのであります。

資本主義の盛んな今日の制度の下にあつては働いたところの收入では到底生活出來るものではない。漸く露命を繼ぐだけの收入しか入らない。幾ら一生懸命にやつても三つの曲線で貧乏線以下に降るべき運命に支配されて居るのが普通である。故に貧乏を退治するに根本的に必要なことは、現在の經濟制度を打壞さなければならぬと云ふ議論が起るのである。但し此問題は今日は申しませぬ。正直に働いても貧乏は貧乏を產み、貧乏の中へ入ると脫出することは非常に困難で恰も監獄の中に入れられたも同じことである。今日の制度がそれでありますから、吾々は知らず識らずの中に、吾々の持つて生れたところの生活權といふものが蹂躙されて仕舞つて、人間といふものは貧乏で宜いものだ、兎や角云つて見たところが仕樣がないから、今日のやうに小さな陋屋に住つて粗惡な食物を食つて、豚のやうな暮しをするのが運命であると思つて居る人が多いのであります。けれ共それは大間違であります。

九

一體今日の文化は誰が造つたのであるか、少數の富豪なり、少數の貴族其他特種階級のみに依つて造られたものではありませぬ。國民全體が協力して造つたものであります。吾々民衆全體が努力して造り上げたものであります。吾々の拵へた文化であるならば、其文化の與ふる恩惠は、造つたところの者全體が樂むのが當然であります。然るに現在の事實を見ると、所謂民衆の大部分は其恩惠に浴して居ない。幾ら物質的文明が非常に進步して、電信、電話、自動車、飛行

機等が盛んに用ひられ、自然科學の發明發見が多くても、其等文明の恩惠物を實際自分の生活に適用し得るところの者は百人の中一人か二人しかありませぬ先祖代々築き上げた千九百二十一年の此進歩した文化の利益を、極く少數の人許りが專有して國民の大部分は憐れな豚のやうな生活をして、生活權の如き當然の權利さへ蹂躙されて居るのでありません。之を默つて居るのは聖人に在らざれば愚者であります。蓋し生活權は國民全體が有つべきところの權利であります。誰でも彼でもオギアと生れた者は皆有つて居る筈のものであるのに、之を惜氣もなく放棄して居るのであるから、非常な誤りではありますまいか。

此權利を放棄すると飛んでもないことになる。米國に延命協會といふのがある。タフト氏が會長で研究をして居るのでありますが、其研究の結果を見ると米國で進歩した生活を營むならば死なないのに死亡する者、病氣にならなくても宜いのに病氣になつて居るものが一ヶ年六十萬人もあります。又平均一日病床にある者三百萬人であるが、其中で半分以上は病氣にならなくつても宜いのに病氣になつて居る。又今日知られて居るところの科學を生活に適用しないが爲めに、人間は一人平均十五年宛生命を縮めて居る。即ち今日知られて居る物理學、化學等の示して居る原理を吾々の衣食住其他生活に適用したならば十五年以上長生きすることが出來ると云ふのであります。事實の示すところに依ると國民の大多數の生活權が蹂躙されて、不得止甚しく非科學的で能率の低い生活をして居るものだから、知らず識らずの中に健康を害し病氣にかゝつたり、生命を短縮して居る。百年迄生きることが出來る人命を有して生れたものでも七十五とか六十歳位で死んで仕舞ふものが多いのである。斯う云ふやうに非常に人生の空費があるのであります。斯う云ふ大きな空費を考へないで所謂勤儉貯蓄を說くのは大不賛成であります。毎月十錢、二十錢貯蓄すれば一ヶ年には十三圓になるとか二十五圓になるとかそんなことのみに重きを置いて、

夫以上に大切な生命のことを考へず、現代人として活動するに必要な食物も食はないで、住むべき家にも住まないで、十五年宛つ命を縮めて居ると云ふが如きそんな大きな損をして居るにも拘らずチビ〳〵貯蓄する事にのみ熱中するのは愚な事であります。

十

今日の時代に於ては勿論奢侈は嚴禁であるが出來得るだけ良い物を食つて詰り元氣をつける。今日學者が研究の結果、私共に敎へて居る標準食物を食ひ、衛生的の家に住つて合理的の衣服を用ひて文化生活を營んで行くならば、今云つたやうな無益の病氣になる必要もなくなる。チビ〳〵したことで儉約し大きな損失を受ける事は今日實に大なる誤りであります。斯く論じて來ると（玆に婦人の方も澤山見えますが）、大切な問題は何であるか、"How to save?" どうしたならば貯蓄が出來るかといふことではなくして、"How to spend" どう金を使つたら宜いか、それが現代の大切な問題である。上手に金を使ふことが出來たならば自然に貯蓄も出來て來るやうになる。昔は何でも宜いから「豚のやうな生活」をしても、勤儉貯蓄を奬勵したものであるが、今日は貯蓄は第二の問題として如何にして能率の高い生活をする事が出來るか、卽ちどう金を使つたならば一番生活を充實させて能力を大にし得るか、と云ふことを考へなければならぬのであります。

私が曾てロックフエラーを訪問した時分に、氏の書記長に、一體ロックフエラーさんは、どれだけの財産をお持ちでせうかと尋ねた。書記長答へて云ふのに「ロックフエラーの財産は餘りに多くて、複雜して居つて判然して居ないが、若し全財産を一弗の紙幣に直して其紙幣を勘定したならば朝から晩まで毎日十時間勘定しても一生涯の間に勘定し切れない。ロックフエラーは、どう自分の金を使つたら宜いかと云ふことに頗る苦心をして居る。故に其使用人の中で頭

の圖抜けた人間は金の使ひ途の仕事をさせ、頭の比較的鈍い人間は生産や收入の方の仕事をやつて居る。金を拵へる方は難しいものではないが、使ふといふことは非常に難しいものであると話してくれた。此 How to spend、そのことが若しも宜しきを得なかつたならば、生活權の行司が出來なくなる。私共は何とかして生活の充實をはかり、生活權を主張し得る資格をつくり、之を尊重して吾々の生活を有意義に續けて行く事に努力しなければならぬ。假令吾々の財産は一時間で勘定が出來るものであつても、或は無一物であつても、生活權だけは自由に行司したいのである。これは當然のことで決して無理な要求でない。それで私の非常に殘念に思ひますのは、其要求の聲が低くて社會に徹底して居ない事であります。どうかして民衆全部が生活權を喜び得るやうにしたいと云ふ事に文化運動が開始さるべきであると思ひ、微力ながら決心を固くするものがあるのであります。

十一

私は曾て大隈侯から晩餐に招かれました。其時大隈さんが言はれたことを感服して聽きました。斯う云ふことを言はれた。歐羅巴の戰爭で、どうして英國が勝つて獨逸が負けたか、それは種々の說もあるだらうけれども、斯う云ふことがある。獨逸が負けたのは、軍閥主義で、民衆の利益を第一に考へない軍閥主義であるからである。獨逸で民衆の利益を眼中に置かないで、上から壓迫的のことをやつて居つたのに比して、英國は全く反對であつた。或日のこと、今日の英國の皇帝が未だ皇太子で在らせらるゝ時分に、救世軍のブース大將が今後の英國の皇帝に成らせらるゝ方には學ばなければならぬことがある。それを私に任じて頂きたい。此皇太子の敎育に關して自分の考へて居ることを是非やらして頂きたい。夫は貧民窟に皇太子殿下を御案內申上げることである、と云ふた時に侍從の人々は、夫れは恐れ多い事である、と反對したが、餘りに熱

誠を以て主張したから、夫れては兎に角試みにやつて見たら宜いだらうと云ふことになつて、恐れ多いことてありますけれども、ブース大將が今日の英國皇帝を其お小さい時分に、此所て云へば賀川豐彦君が研究して居られる貧民窟よりもつとひどい東ロンドンの貧民生活を御見せ申したのてあります。ところが侍從達の非常な心配は全く無用て、殿下には甚しく御氣に召して御喜びになつた。今迄殿下の御考へては家といふものは立派なペンキ塗とか金箔銀箔を張りつめたやうなものばかりだと思つて居られたところが、貧民の家を見ると、此の邊の貧民窟と同じやうなものて、非常に興味を持たれた。そして殿下の御希望てモウ一度連れて行つて呉れと仰せられて、其翌日も亦御案内申した。英國民といふものは決して大臣とか富豪ばかりてはない。斯う云ふやうな生活をして居る者も矢張り自分の國民だといふことを御覽になつて、民衆の幸福といふものを第一に尊重されて、それが土臺になつて、今日の英國が今度の大戰爭て勝つた理由てあるといふことを大隈さんが述べられましたが、我國て大に學ぶべき眞理が含まれて居ります。今日何れの國に於ても軍閥主義、抑へ付け主義を以て政治をやつて成功するものてはありませぬ。國家といふものは國民全體が拵へた有機體てあります以上は、其個人々々の生活權が十分に尊重されて茲に始めて本當の力强い國家が成立つのてあります。個人の生活權、卽ち生れるとから有つて居るところの此權利が蹂躙された場合には、幾ら他の制度をよくしたり、幾ら法律を完備して見たところが、到底國の隆盛は圖り得べからざるものてあります。此樣の事は自明の事てありながら、事實は却て反證して居る事を嘆せざるを得ません。

十二

文化の賜てある文明の利器の使用が未だ民衆に普及して居ない一二の例を擧げんに電話を使ふことの出來る家庭は何軒あるか、驚いたのは電話を附けやう

と思つたならば大都會では千金を拂はなければならぬ。私共の住つて居つた人口七十萬のボルチモーア市で電話が欲しいから電話を附けて呉れないかと電話局に云ふと、直に宜しいと云ふて、其翌日電話の機械を持つて來て附けて呉れる。日本の樣に電話が賣買されるといふことは夢にも思つて居ない。要らない時には直ぐ其事を電話局に通ずると、それで直ぐ取つて仕舞ふ。使用料も其當時僅に二弗五十仙で非常に安い。故に富者でなくとも文化の賜物を自由に使ふことが出來る。自動車の如きもさうであります。田舍へ行けば行く程自動車の數が多い。最早米國邊では自動車は贅澤物ではない。文明の利器が民衆化されて民衆が文化の果を樂んで居るのであります。卽ち彼等は生活權を自由に行司して新時代に生て居るのであります。我々日本人も同じ二十世紀に生れたもので、電話を使ふのは便利なものであると云ふ智識を有つて居り、又電話を使はなければならぬ必要もあります。同じく自動車を用ゐれば大變都合が好いと云ふことを知つて居り、又其必要を感じて居るのであるけれども、斯かる文化の恩惠物を實際利用し得る者は百人に二三人あるかないかでありませう。民衆が利用する事の出來ない樣な文化は非常に低いものであります。日進月歩の今日に生れた者が當然所有すべき生活權の中には、電話の如き、自動車の如きものを使用し得べき權利を含んで居る筈であります。自動車や電話のみでなく、私共の生活能力を增進し、社會の幸福の爲になるものであるならば、成るべく民衆一般が使用し得る樣にすべきである。此邊の處まで私共の叫を高くして、大に努力しなければ生活權の主張を徹底する事は出來ないと思ひます。

十三

更に違つた方面から生活權の問題を考へて見まするならば、斯う云ふ工合に說明したら宜いと思ひます。元來生活はどうして成立つか、夫れは欲望の滿足に依るのであります。欲望は文化と共に絕えず進化して其質に於ても量に於て

も次第に發達するのである。極く幼稚な野蠻國に於ては單に自然的の慾望のみが存在して居りまして、例へば腹が減つたら何でも宜いから食へば宜い。腹が張れば夫れで滿足して更に食物の事は考へない。立つて居るのは苦しいから腰掛けたいと云ふ欲望の發達に就て考ふるに、若し單に幼稚な自然的欲望であるならば、何にも椅子に腰掛けなくつても宜い。石ッ塊でも何でも宜い筈でありますけれども、社會が少し進歩して來ると自然的欲望の次に身分的欲望が出て來る。身分も外分も考へず唯、腰を掛けるだけの事なら石塊(いしころ)で澤山である。けれども、五大强國の日本の神戸のやうな活動の盛んな所になると石塊に腰掛けてはいけないといふので、斯う云ふ椅子に腰掛けて以て身分的欲望を全うするのであります。それが種々變化してもう一つ進むと快樂的欲望が發生する。

椅子には種々の種類があるから、唯だ身體を支へるだけのものでなく樂になるやうな椅子に腰を掛けると詰り生產能力が增加します。石塊の窮屈な椅子に腰掛けて居ると働きが充分に出來ない樂な椅子に腰掛けると働きが能くなり自然能率が大になるのは當然の事であります。甚だ失禮ですが實例を示せば此の前に押込められて椅子に腰掛けて居られ無い方は單に自然的欲望を滿たし居られるだけであります。快樂的欲望は勿論のこと身分的欲望さへ滿足して居ない。無理に敷詰めた座の上に胡座をかいて居るのでは自然的欲望のみを全うして居る。卽ち野蠻時代に返へつた狀態で甚だ御氣の毒な事である。せめては大部分の諸君の如く身分的欲望を滿足する腰掛位に腰を掛けて貰ひたい。否今日の如き忙しい時には身分的欲望のみでなく、進んで快樂的欲望を滿足させて生產能率を高めなければならぬ。卽ち司會者が坐つて居るやうなお尻の處にはバネの附いて居つて樂に腰掛けることが出來て、長時間講演を聞いても背中が痛くもならない椅子に腰かけるのが快樂的欲望の滿足で大に奬勵すべきであります。而して快樂的欲望がモウ一歩進んで誤つた發達をすると奢侈的欲望になつ

て來る。贅澤になつて來る。奢侈的欲望を滿足したとて別に能力が增進する譯ではない。例へば椅子に金の鈕釦をくつつけるとか、緞子を張つて見たり、金の房をぶら下げて見たとて、生產能力の增進には何の役にも立たない。反つて壞れはしないかと心配する位のものである。奢侈は富の社會的浪費であるから奢侈を廢して其經費を自然的、身分的、及び快樂的欲望滿足の資に用ふることが出來たならば如何に社會の富は活用され社會の幸福を增進し得るであらう。奢侈は絕對に許すべからざるものであります。

併し快樂的欲望は大に奬勵すべきもので、今玆に八釜しく主張して居るところの生活權を認むるならば欲望滿足は快樂的欲望まで進む可きである。幼稚な社會では漸く自然的慾望の滿足で足りたのであるが、社會が進步して身分的慾望滿足が必要になり、更に學問が非常に進步し社會の富が著しく增加して、今日では快樂的慾望を滿足させる事が文明人の特權になつたのである。快樂的慾望を全うすることに依つて生活權が自由に行司されるやうになるのであります。而してそれを國民全體が喜び得るやうになつてこそ民衆文化が立派に建設されたと謂ふのである。

十四

私共は生活權を主張すると同時に大に其責任を感じなければならぬ。今日日本人の缺點は、權利計り主張して責任を充分に全うしない事である。例へば我國の政治家など仲々盛に正々堂々論議なす人もあり、又種々と立派な計畫をなす人があるが、最後まで進んで其責任を負はんとするものは甚だ少ない。責任を背負はない人が多いから、實業は本當に發達しない。政治も眞實に巧く行かないのであります。文明國の民として生活權を主張して快樂的慾望の滿足を得なければならぬと云ふことは、當然の主張であるが、一夫と同時に果して吾々が生活權を叫ぶだけのことをして居るかどうか、大に反省すべきであります。

此問題に關して先づ第一に考へなければならぬ事は慾望の訓練といふことである。人類の慾望が進歩すると物質的のもの以上に精神的の方面にも發達するものである。精神的慾望が向上して始て經濟的の方面で物質的慾望が調節され得るのである。物質以上の道德宗教の力を籍りて慾望の訓練をして行くならば慾望の進化を快樂的に止めて決して奢侈的慾望に入るやうなことは起らんであらう。快樂的慾望を滿足せしめんことに努力するのはよいが、若し一歩誤つて惰怠者になり十分働かない樣な事になつたならば、却て社會を害するに至るのであります。

大に生活權を行司して文化生活を送らんとするならば、私共はどうしたつて今日の人の働いて居る二倍以上の働きをしなければなりませぬ。二倍以上も大に活動して能率的生活を營まんと決心するならば、奢侈に流れるが如き餘地はありませぬ。

奢侈の意義に關しては種々異說がありますが、其特性として第一に考へるべきは不釣合と云ふことで、如何なる階級の人でも不釣合な消費を行ふならば奢侈を行ふて居るのであります。だから京都大學の河上博士は反對される樣ですが、私は奢侈は富者に限つたものでなく貧民、中流階級にも盛んに行はれて居ると思ひます。單に自分の資產や所有に對して不釣合な消費を云ふばかりでなく其消費の金高と其消費の結果の間に起る不釣合も奢侈を構成するものである。奢侈は有害消費と區別すべきものであるから奢侈其ものは有益なものでも、其消費者の如何によりて奢侈として排斥すべきものが起るのであります。

先づ富者の奢侈の一例を擧げて見ますれば、岩崎さんの廣大な庭園の如きものであります。幾ら金が澤山あつても、今日生活難に追はれ住宅難に追はれて居る社會の弱者が無數にあるにも拘らず、自分許り大きな森林の如き庭園を持つて、市中の眞中に監獄のやうな高塀を圍つて專有して居ることは、どんな富

豪だつてそれは奢侈てあります。東京の市中に一萬坪以上の地面を私人が持つて其利用を占有して居るといふことは特別の事情があるのてなければ怪しからぬ奢侈てあるが、かゝる大地主が八十八人とかあるそうてあります。どんな富豪てあつてもかゝる奢侈は現在の我國社會ては是認すべからざるものて、極力攻撃しなければならんのてある。彼等は一時も早く適當な方法て公衆の爲に之を開放すべきてあります。僅かばかりの庭園税の課税ては不可ない。課するならば九十九パーセント位まて税に取つて仕舞ふ位の覺悟をもつて、其不當を責むべきてあります。

國家政府にも、亦奢侈があります。今日の如く家が無くて家賃が馬鹿に高い時に、政府が土地の利用を制限してることは奢侈てある。電車に乗つて屢々見ることてあるが、東京の郊外には未だ空地が隨分澤山ある。何故此邊に家を建てないだらうと思ふと、陸軍用地と云ふ札が立つて居る。(勿論軍隊も大切てあるが、其軍隊が保護して居る人民の生命は更に大切てある。其生命を宿すに適當な住宅が缺乏を告げて居るにも拘はらず、陸軍用地と云つて其土地の利用を禁ずると云ふことは隨分無法なことて、吾々は大いに攻撃したいのてある。

富者にも政府にも奢侈がありますが、尙貧乏人や中流階級者にも恐るべき奢侈があります。例へば此處にお集りの美裝して居られる貴女方が御用ゐになつて居る着物は奢侈ではありますまいが、勿論美しいと云ふ事は殊に女子に大切なことてあるが、必しも高價な奢侈的衣服を用ひなくても美しくなり得るのてあります。多分神戸のやうな進歩した所ては其麼ことはありますまいが。私の知人達には二三百圓位の月收よりない者てありながら、其奥さんや娘さんの被服を見るとそれはすばらしいものがあります。然かも此人達の食物は非科學的て粗惡なものて、唯習慣的に朝は味噌汁、香の物、お晝は漸く一品あるかないか晩も同樣と云ふ具合のものを食つて居る。食ふ事は自分の家て行ふのだからど

んな不味なものでも體面を汚さないが、着物を着て外出する時分には澤山の人に見られるから、虚榮心の强い人々は着物に金を掛けることを惜まない。借金してまでも流行を追ふて得意然として居る。流行と云へば今日の流行には隨分馬鹿げたものがある。綺麗な顏をした者ならば夫でも似合ふかも知れないが、御粗末に出來た人が夫れを眞似するのは寧ろ滑稽であります。普通我被服狀態には甚しく不釣合なものがある。其他種々の點に於て中流階級者にも奢侈があるから深く注意すべきである。

一方に於て生活權を主張する者は、他方に於て必ず自分で自分の身を愼んで大なる責任を自覺すべきである。私共は單に昔日の生存權のみに滿足する許りでなくして、進步した時代に於ける生活權を十分に主張し、それと同時に必ず附隨して居る責任を全うすると云ふことが一番大切だと思ふのであります。

新婦人と文化運動

森本厚吉

一

昨晩大阪で有島君が婦人問題に就き講演されましたから、今日は私が夫れを取扱ふ順番になつて居るのであります、けれ共私は今何だか話し難い樣に感ずるのであります、と申しますのは、有島君の樣な藝術家は、穢ないものでも綺麗に見えるやうに言ふ術を心得て居られるから婦人の惡いことを言つても、惡口に聞えないで、宜い工合に婦人の頭に入つて行く、それは一方に於きまして は、有島君は澤山に美しい婦人を愛讀者として持たれまして、其著作者が理想化して居られるといふ爲でもありませう。

私は不幸にして絶へず現實的な經濟問題を專門に研究して居りますから自然

餘りに實際的に流れ易く、何を見ても價値論が直ぐと持上つて來る樣な次第てあります、而して現在普通の人の頭には現實の美と云ふ事は未だ明かに認められて居ないのてあります。

詩人ウォルズウースてありましたか路傍に咲いて居るつまらない雜草の花を見ても感慨胸に溢れて涙をポロ〳〵出して居たさうてあります。パンの問題なんかを超越して詰らない花を見ても涙が出る程の細やかな感情を有つと云ふ位ひまて人間の情緒を美化したいものてあります。

けれども、私共が現在同胞の大多數の生活狀態に就て詳細の事實を研究して見ますと雜草の花を見て涙を出すが如き餘裕を見出し得るか否やは甚だ疑問てある、寧ろ其の花が生活を支ふる爲にどれだけの價値があるのだらうと云ふことが第一に頭に浮んて來るのてあります、斯の如き事情てありますから私が今晩茲に婦人問題を御話する時に當りましても、定めて婦人の方々に不快を覺えしむるが如き事は無いかと悲しむのてありますが、何とも仕方がありません。

唯私はブルといふことが嫌ひて、白いと思つたら明白に白いと申したい。惡いと思つたら眞直に惡いと云ひたい。而して私が今晩茲に言はんとすることは我國文化の將來に取つて、非常に重大な事件てあると信ずるのてありますから言葉を飾つて御機嫌取の講演をする如きは出來ない事てもあるし又欲せざる處てもあります。故に自然惡口も云はねばならず其結果として方々から攻擊も參りまして甚だ迷惑てあらうと思ひますが將來を憂ふる念が切てありますからそんな事を恐るゝものてはありません。

私が中央公論に澤奄亡國論といふ論文を出しましたが、未だに其惡口を方々から云つて來る。先日も「日本及日本人」て其論を駁した人があるから讀めと注意がありました。けれ共愉快に感ずるのは惡口を云ふ人以上に共鳴して大いにヤレ〳〵と云つて下さる人の方がずつと多い事てす(拍手起る)私は皆樣の贊同

の拍手を有難く感謝致します。

二

私は先づ第一に日本現在の文化と婦人の關係は如何なるものであるかといふことを考へて見たいのであります。そして其文化を將來もつと高めるには絶體的に婦人の力に俟たなければならぬといふことを話したいのであります。

此夏朝鮮、京城に參りました時、總督府の依頼で數百名の總督府官吏に話を致しました。其節でありましたが或隨分地位の高い官吏から次の樣なことを聞されました。即ち天長節の祝日が近く來るのであるが、實は非常に心配な事がある、それは(秘密だとは言はれなかつたから話しても宜しいことだと思ひますから申します)朝鮮は日本に併合されて居るのであるから各小學校で天長節祝賀の式を擧げなければならぬが、どうも今日朝鮮人の子弟の精神狀態から考へると如何に嚴肅に天長の御祝をして見ても、君ヶ代を歌ふ時になつて恐らくは一人も歌はんだらうと察せられ眞に困つたものである。日本の小學校である以上は天長節に君ヶ代を歌はない譯には行かぬ、然るに君ヶ代を歌はさうと思つたところで歌つて呉れなければ尙更困つた事になる。どうしたものかと私は眞面目に相談を受けたのでありました。

果してどうなつたか、私は聞きたいのでありますが勿論新聞には何等の記事も出ませなんだ。何も書いて居ないから歌つたのだらうと思ひたいのですけれども、私は寧ろ反對に考へざるを得ないのであります。何故なれば、朝鮮へ行けば誰でも解る事でありますが私共日本人として知らなければならぬ事で知らないことが澤山ある。

東京、大阪、京都等の大新聞ですら我國の重大事件の全部を書いて居るのではない。誰一部分の事實より知らせてくれない、朝鮮問題に就て詳しく調べた吉野博士等の話を聞きましても大きな事件で新聞が少しも報導して居ない事が

澤山あるのを知るのであります。斯く申すものゝ、私は必らずしも新聞を惡く云ふのではない、新聞は書きたいのであらうが、政府の命令が嚴であるから、都合の好い記事は出させて宣傳的に書かせるが、都合の惡いことは出させない。考へれば新聞社は可哀想なものであります。

三

斯の如き事情でありますから、朝鮮の小學校で天長節に君ヶ代を歌つたか、歌はないかと云ふ問題も、僻んだ目で見ると歌はなかつたのではないかと思はざるを得ない、幸に若し口に之を歌ふたとしても、心では舌を出して日本帝國を呪ふた朝鮮人が多くあつた事は明であります。

あれ程澤山の金を掛けて、非常な苦心をして併合し得た朝鮮でありながら、假令領土は我國のものであつても、今尙ほ其人心を得ることが出來て居ないのである、故にかゝる併合は決して成功したと云ふ事は出來ない。

否朝鮮許りではない、臺灣に於てさへ未だに土人の人心を我國は得て居ないのであります、滿州の我殖民地に行つても其通りであり、又米國其他に於ても同樣であります。

今日迄日本の海外膨脹はドシ〳〵武力で征服して、土地を獲得することには成功しました。日清戰爭でも、日露戰爭でも、最近の戰爭に於ても、領土を武力で擴張することは出來たが、人間の心を捉へることには常に失敗して居る。之は能く我國文化の非常な弱點を示して居るのであります。軍國主義で築きあげた我國の文化は不具の文化である。文化といふものは、武力許りで出來るものではありませぬ。一方に武があるならば、他方には文がなければならぬ。一方には價値を論ずるところの經濟の如きものがあると同時に、他方では藝術の如き理想的のものがなければならぬ、種々のものが寄つて集つて、小數の人ではなくして、民衆が擧つて努力する事に依りて眞の文化は成り立つのであります。

我國の文明史を播いて見ると、精神的の方面に注意を拂はないで、武力萬能物質的方面の開拓を一生懸命にやつて、殖民地を開いたのであるから、大正の御代に於きまして、我皇帝陛下の御誕生の御祝をする時に、心から國歌を歌はない國民が有るか無いかと云ふ樣な、心配をしなければならぬのは、甚だ情けない恥しいことであります、此一例から考へましても我國現代の文化が行詰りになつて居ると云はねばならぬのであります。

四

斯の如き事情に陷つた理由は種々ありますが、今晩私が申上げたいのは、今迄の文化の缺陷は主として男子が築き上げたので、婦人の力は餘り加つて居なかつた事であります。今迄の婦人は臺所の隅に引籠んで、朝から晩まで料理をするとか、縫物や洗濯をするとか、或は主人に小言を云はれるか、何とか彼とか何等文明に貢献する物質的及び積極的の働きをしないで、文化運動は全部男子に任して置いたのであります。

それが故に男子の築いたところの文明は非常に發達したけれども、之は或程度まで來ると行詰つて仕舞ふ、丁度下手な碁打と同じで、相當の程度までは素人でも打ちますが、それ以上に上らうとすると、一定の方式を用ひて稽古をしなければならぬのであります。日本の文化も其通りであります、男子許りて築き上げたものでも或程度までは發達し得るが、今一つ進んで、世界の强國と肩を比べて、さうして國民、人類全體の幸福の增進といふ程度に、引き上さんとするにはどうも不十分であります。

今迄の文化運動に携つたところの者は、皆んな男子であつて、女子の力といふものは殆んどない、故に今後の文化を完全な文化として、我國民全體の福利を增進する爲には、婦人の力に俟たなければならぬ。幾ら男子が偉くても、到底男子だけては、男女の世界が完全に發達し得るものではありませぬ。

五

先達つて支那行の途中門司へ寄港しました時、私は彼の有名な石炭積込みを少し研究しました。三百五十噸の石炭を本船に積むのでありますが、其積込みに働いて居るものを見ると、約百名の仲仕が二十五人づゝ一組になつて、四ケ處から一ケ處約八十噸程づゝの石炭を本船に入れるのであります、其中私が特に注意した一組の中に六名の婦人が居りました、之は面白いと思つて、其仲仕の親方、即ち監督して居る人を捉へて種々と話を聞きました、他の船客は門司の市中を見物に出掛けたのでありますが、私は此勞働問題の見學の方が餘程面白くかつそれで賃銀は幾らて、どんな生活をして居るかと云ふ樣な事を三時間程の間聞いたのであります。

而して私は婦人方に是非聞いて頂きたい重大な事實を發見したのであります。一組の仲仕が八十餘噸の石炭を積入れて、男一人の賃銀は平均三圓三十錢位につくのであります、女の賃銀は幾らかと聞きますと、男の六割ですといふ、それは不思議だ、私は彼等の勞働振りを二時間以上もかゝつて見て居つたのでありますが、六人の婦人の内で二名は男だけの働はないやうでありますが、殊に私の注意したところの一二人の女は男以上の勞働能力を有して居りました。一番苦しい仕事は筏の中へ石炭を入れるのでありますが、その仕事を女がやつて居る、一寸も休まないで二時間打通して働いて居る、それて賃銀は男の六割より取らないといふことを聞いた時に、それは不思義ではないか、彼の女の働き振りを見て居ると怠けて居る男に比べてズッと能く働いて居る。それで男の賃銀の六割より取らないのはどう云ふ譯か、何か面白い理由でも敎へて呉れるだらうと思つて居つたところが、それは女ですものと云ふ簡單な理由でありました。さうすると貴方の所では男だと幾ら女だと幾らと云ふ風に勞働の報酬を拂ふので、仕事の高て拂ふのてはないかと聞きますと、私が如何にも

大馬鹿者でゞもあるかの如く、そんな面倒なことは存じませんか、女だから男の六割であるのは當然の事で何の不思議も無いと斷定して仕舞つたのであります。

六

斯の如く評價されては如何にも日本の婦人は侮辱を受けて居るてはありませんか、米國が戰爭に參加した時に、紐育市て電車の車掌が足りなくなつて、初めて車掌に女を使ひました、之れ實に世界始めての企てゞありました、其結果はどうてあらうかと云ふことは面白い問題として一般から注意されて居つたのてあります。

一ヶ年を經過した後其間に於ける女車掌の仕事の行程と、男車掌の仕事の行程との比較研究を學者が發表したところに依ると、女車掌の働き高も、男車掌の働き高も一寸とも變りはなかつたのてあります。

從つて女でも或種類の仕事ならば假令それが肉體的勞力を要するものでも、男と同じだけの仕事が出來るのてあるから、同等の取扱を受けて差支の無い事は實際上明かに證明された事てあります。然るに今日日本ては未だ昔の儘て勞働能力の如何を顧みず唯だ女だから男の六割て澤山てあると考へて居るのてあります。

向ふの人は男も女も同じやうに働て合計二百の仕事をして居るのに、日本の婦人は六割の能率よりないとすれば男女二人て百六十の仕事しか出來ないのてある。だから男女協力て爲すべき仕事は歐米人と幾ら競爭しても競爭にならないのてあります。若し皆樣が女は男の六割て足れりと評價されて憤慨しないならば夫れは意氣地のない方て新時代に生る資格はありません。

世の中は休みなく活動して居る。地球は急行列車よりも早く動いて居る。ボンヤリして居る者は亡びて行くのは當然て、時代と共に活動しなければ、退歩

せざるを得ない世の中に我共は生活して居るのであります。戰爭前と今日の時代とは雲泥の相違があるにも係はらず、今尙戰爭前の古い考を以て婦人問題を取扱つたならば夫れは非常な沒理である事は謂ふ迄もない事です。

七

先刻停車場から此所へ大急ぎで自動車に乘つてやつて來ました。京都の街は幅が非常に狹くて、自動車で走るのは甚しく危險を感じます。今から二三十年前即ち自動車なんかない場合には、此道で十分であつた。故に封建時代に京都の道幅が狹いと云つて改築運動をしたものはない。然し今日のやうに自動車が走らなければならぬ時に於ては、之では狹い。二進も三進も行かないのであるから、家を壞して道を擴げるより仕方がない。即ち市區改正を斷然行ふ可きであります。

婦人問題に於ても今其時代が來たのであります。因習に囚はれて、どうか斯うかなるだらうでは行かない。今日は婦人も男子と同樣に各方面の改造を斷行して、男女共に、最高限度に個人の能力を發揮しなければならぬ時であるから、どうしても根本的に個人生活を改造し、續て社會生活を改造しなければならぬ時勢となつたのであります。勿論男子も改造しなければならぬのでありますが其問題は今晩は吉野作造さんに任して、私の受持である婦人の改造の必要を力說せざるを得ないのであります。

どう云ふ工合に改造するかと申しますれば、私が演題に揭げて居る樣に先つ舊い婦人を新婦人にする事であります。去りながら、私の言ふ新婦人とは所謂「新婦人」ではありませぬ、却て所謂「舊婦人」に屬する良妻賢母主義の婦人を云ふのであると申しますれば、所謂新しい女の方々には失望を與へるでありませう、けれども私の良妻賢母と云ふのは、現時代に適應したものであるから舊式の良妻賢母とは大いに異つて居る。それで之が大問題となるのであります。

元來男と女とは種々の點に於て違つて居る。肉體の形に於ても、作用に於きましても、種々の點に於て先天的に非常に違つて居る。本性的に違つて居るところのものを、人爲的に女も男も同じことをしなければならぬと云ふのは、それは間違ひてあります、勿論男女の人格に於て相異の有る筈は無いが、分業的に女は女としての天職があり、男は男としての天職がある、同じことをしなければ男女同權にならないと云ふやうな考へを持つたらそれは大間違ひてある、私は婦人は婦人らしくなつて始て婦人の價値が十分に發揮されるのてあると思ふのてあります、何も男の領分に入つて來る必要はない、男子も婦人の領分に入らないて御互に干渉してはならないのてあります。

今日のやうな日本の狀態に於ては、婦人がもう少し政治思想を有つことは甚だ必要なことてありますが、何も必らずしも今直ぐ婦人が投票しなければならぬと云ふことはないと思ふのてあります。日本に穢ないものが三つある。第一共同便所、第二遊廓、第三國會議員だと云ふ人まてある位ひに一部社會の人から卑下されて居る國會議員選擧に關した婦人參政權と云ふやうな問題にたづさはらなくとも新婦人の仕事は澤山に存在して居るのてあります。勿論婦人が參政權を得る時代も何時かは自然に來るてあらうが今は別に急に必要ありません

私が主張する新婦人と云ふのは、先づ現時代に適した、良い母親を云ふのてあります。今一二の例を擧げて幾分婦人方に刺戟を與へ反省を促す事が出來たならば自然に新婦人の文化運動は起るてあらうと信ずるのてあります。

八

新婦人てある以上は、婦人に最も關係の密接てあるところの生活問題に關して新しい見解を有して居らねばならぬ。生活問題と云ふと先づ第一に食物、衣服、住宅、社交等の問題が起るのてありますが、果して之等婦人の與はるべき問題が過去半世紀の間に於て、時代と共に變化をしたらうか、不幸にして私は